

嵌込んだものに過ぎないからで、その一ツツを引離して考へて見ると、それ／＼一小學問になつてゐるのだから、この小學問各種に對するだけの事ならば、一小研究方法——例へば讀書法のみでも或ひは足らん。だが、その全體に對しては、矢張、モソツト大なる研究方法が欲しいのである。たゞに普通學のみではない。學校教育の上に於て謂はゆる専門學に至つても、その實、寧ろ普通學的内容に成立てるものが一般だとの旨は、これも嘗て突込んで置いた所である。教育の種類及び程度が一學校の以内といふ位までに局限されては、上に掲げた大學問の場合から見ると、餘程目的が狭くなり、學問が小となつて來たかのやうだが、その事實は好し違はぬまでも、小學問實は廣學問なのであるから、學問の眞義よりすれば、未だ甚しき小範圍の學問とまで墮し來つたものとは謂ひ難い譯なのである。たゞ其の程度の低くなることは主として深い學問を淺くするに止まり、その割合に學問の範圍を小とするも

のではない。して見れば、今日普通に人の修めてゐる學問は、容易に其の大學問たるの地位から降下して、眞個の小學問——嚴格に、或る一種の學術と云ふが如きもの——となつて來さうにも思はれない。従つて又、それに對して小研究方法の一が部分的研究方法の地位より向上して、その全體的な研究法として應じ得るの機會も然う速かに遣つて來さうでないのが當然なのだ。

第三節 學問それ自身に一定の大小なし

△人の見様次第、考へ様次第、また其の取扱ひ方一ツ▽ 或る一種、或る程度の教育といふまでに局限された學問も、なほ且つ小ならずとせば、世に小學問なるものは果して存在せざるにや、はた又、讀書法を始めとし、之と同等もしくは之より以下なる各種の小研究方法に至つては、常に唯だ目的たる學問に對し部分的研究法の役目を爲すのみにして、その能く全體的な研究法た

るの機會は終に來るべきの見込なしと、かくの如く最後の斷案を下して可なるかと云ふに、夫れ或ひは然り、或ひは然らずと謂ふの外はないのである。今、異種の學問同士を比較して見ることは暫く措き、全く同一の學問（普通學的のもの）は非とす。蓋し其れ自身に多種の學問を含めるが故なり。たゞ然その研究目的を同じうし、一あつて二となき學術種類、例へば「文學」とか「法學」とか云ふが如し。嚴格に謂ふ専門學的のもの、即ち是れ也）と認め得べきものに就いてのみ言ふとしても、さて其れだけの事では、やはり大學問だとも小學問だとも、一概に速断するといふ譯には行かない。そもく教育上に於ける學問は、何時かも申した如く眞個に「學問の獨立」を得てゐるものならず、必ず共、教育の鑄型に嵌めて按排がしてあるのでもあり、とにかく其の大小が概略は定まつてゐるものと見て差支ない道理で、従つて學校と學校との間、又は學校と學校以外との間に於て、いづれが比較的大なる

學問、いづれが小學問であらうかと、彼此見分けを付けることが然まで困難といふのではない筈である。ところが、學校の有りや否やは措いて問はず、全く教育といふものをも亦、暫く度外視し、以て學問それ自身を獨立させたものとして考へて見ると、要するに其の大小は殆ど一定してゐない。さうして事實、之を修めんと欲してゐる人の見様次第、考へ様次第、又その取扱ひ方一ツで以て、同一の學問が或ひは大學問となり、或ひは小學問となる。換言すれば、第一には學問する人自身の目的、第二には學問の仕方、これが歸する所は相循環して、矢張り學問の大小をも決定するに至るといふ顛末である。

△例へば物理化學の如き普通教育中の一學課もまた同様▽ 勿論、學問を獨立させて見るからと云つて、穴勝ち學校以外に於てする學問の場合に限つた話ではない。學校に於ても、なるべく教育に囚はるゝの弊より脱せんとす

れば、例へば夫の早稲田大學が學問の獨立を標榜し、之に基いて「自修的研究」(これ即ち吾人の謂はゆる「獨學主義」の學問に外ならぬ)といふやうな遣り方を獎勵してゐると同一般、生徒の自由意思で、隨分教育の紋切形から學問を抜け出させることも出来得べき譯で、殊に高等専門の學校にあつて然るを見るが、中學校などでも行はれるには行はれる。たゞ普通學とか専門學とか——否、普通教育とか専門教育とか云ふと「普通」の方は勿論、それに對抗した「専門」の方も、何となく既に一廉の大學問を成してゐるやうに聞える。だから、さういふ大分類には拘泥せず、例へば普通教育の中に屬する一科目であるが如き物理學なら物理學、化學なら化學、かうした種類の一學問に就いて言ふものとしても敢て差支へはないのである。然るにも拘らず、この物理學なり化學なりが、やはり何時も一定の大小(學問の廣狹深淺)を有してゐるものと見て仕舞ふ譯には行かない。そは何故だらうか。

△學問の一小部分も直ちに小學問とは見るべからず▽ 物理學の如き、化學の如き、言ふまでもなく學問全體から見た日には、いづれも其の一小部分を成すものに過ぎない。否、學問の全體は倍措き、その物理學や化學を以て全學課の一部としてゐる中學教育なども、其等に較べては餘程の大學問だといふことになる。即ち上の方から瞰視して來ると、物理學、化學等は、實に此上ない小學問であるやうな觀がある。けれども、それは何時も然うであるとは定まつてゐない。理科大學では専門的に其の物理化學を研究する。卒業しても、すぐ其の上に物理化學の研究すべき部分は大々的に残つてゐる。たゞに學問全體が然るのみならず、その一小部分に外ならざる物理學、化學の唯だ一方——更に細かく言へば其の一部分でさへも、殆ど無限大の學問たるが如き實を有してゐる位なのである。畢竟、是等の學問に對しても、まゝ學校は便宜のために大凡の所で區切りを附け、いはば好い加減に夫々の大小を概

の書籍一部に目を通して讀了したばかりで、この學問は終らぬものでもない。讀書法必ずしも部分的研究法たるに止まらず、どうやら全体的研究法となり得たやうに見える、即ち目的が小學問だから、之に對しては小研究法が甚しき破綻を示さずして濟んでゐるやうに思はれるのだ。

△十二分の發達を遂げざる學問、或ひは斷片的知識など▽ 又、物理、化學の類よりは遠く向下して、まだ一學問として十二分の發達を遂げてゐないもの、或ひは例の斷片的知識などいふものに至つては、これを眞個の小學問に近くなつて來たのであつて、當然、讀書法以下の小研究法も（必ずしも部分的研究法としてのみでなく）随分よく間に合ふことがあらうも知れない。が、苟も一學術に對しては、特別に之を「小學問」として取扱ふに非ざる限り、通學法又は獨學法（いづれも其の全体的研究法たるに近し）より以下の小研究法は、いづれも多少共に不足を有するものと見てよからう。

第四節 學問は千變萬化、秘術は臨機應變

(前章及び本章の結論)

△學問は横にも無窮、縦にも無窮なるを原則とす▽ さて、吾人は前章より引續いて述べて來た所に對する「結論」を此所に掲ぐべき段取りとなつた。左に之を約めて言はう。

抑々「學問それ自身に一定の大小なし」と云ふ。他なし、これは學問が無限大なものであつて、たゞ人は普通に之を有限のものとして取扱ふといふことを語るに過ぎない。學問全體の無限大なことは既に明瞭である。然るに前陳「物理學」「化學」の例によつて之を見れば、學問全體の一小部分に止まつてゐる個々の學問も、亦それ々に無限の大なる内容を有し得べきものたるは、もはや疑ひを挾むの餘地がない。蓋し學問全體の無限大とは、その横と

縦とに窮りなき長さを有するの謂ひである。横にも窮りなき長さを有し、縦にも窮りなき長さを有してゐる。さうして横（廣狹）に學問の種類を生じ、縦（深淺）は教育の程度となる。學問の種類は横に肩を並べ、教育の程度は縦に背を延してゐる——前者は同列に立ち、後者は真直に平行線を作つてゐるやうな形である。同列の種類は窮りなく多数に上り、平行線の方も無限の延長を有すべきだが、教育の程度としては略して之を中斷して置く次第に外ならない。併し横縦共に無窮なのが原則たる以上、學問の種類が教育の範圍内に収まり切らぬは勿論、その一種類に就いて見ても、縦の長さ即ち學問の深さは、また教育の程度を以て終りとせず、中々に際涯なかるべきが當然とせねばならぬ。學問全體より見れば僅に一小部分たるべき各種の學問も、其實は此の如くに無限大——少なくとも其の深さに於て無窮大なものだ。これ果して小學問であらうか、そもく又、大學問なりとすべきか。

△同一の學問が或ひは「最大の學問」となり或ひは「最小の學問」となる▽
學問の大小とは、横の長さとの相乗積である。廣狹深淺である面積である、即ち内容である。學問全體は間口も奥行も共に無限大で、面積に窮りあるを知らぬ「知識の畑」である。この無限大なるに對し、有限なる人力を以てして、その畑から果實を收穫し來らんとするの事業は、もとより容易な仕事ではあり得ない。普通の人は多方面の知識を要求する所から、寧ろ横の長い方を探り、縦の短きには甘んずる「廣くして淺い學問」を選ぶ。即ち普通學的のものを以て可とするのである。之すらも「最大の學問」として取扱はるれば、優に文明紳士式の一生的學業となる。降つて學校教育上の純然たる普通學となつても、單に其の横の長い一方——學問の多種なることだけを以て、結構、大學問たるに値してゐる。いはゆる専門教育は、寧ろ純義に於て普通學と専門學との折衷に近いもので、いはゞ一種の混血兒である

が、とにかく大學問たるは同断である。

唯だ専門の學者に至つては、或る一面の知識を要求するに急なるの餘、普通の人とは反對に「狭くして深い學問」即ち横の短くして縦の長いものを攝取することになる。さうして彼等は僅に一種の學問を修め、て其の蘊奥を極めんとするばかりに、やはり之を以て一生の學業とするを厭はない。見よ、彼等の前に在つては、學問全體の一小部分たる各種の學問も、堂々たる「最大の學問」となつてゐるものではないか。——さうかと思へば、それと同一の學問が、單に中學教育の一學課となつてゐる位は未だしも、甚しきは一冊の價數十錢より出でざる書籍の上で、憐れむべき「最小の學問」かのやうな、冷酷極まる待遇を受けてゐることもある。殆ど人の好運と薄倖との極端なる對照を其の儘!

△大は學問全體より小は部分的知識に至る迄の千變萬化▽ 之を要するに

學問の大小は、既に異種の間に於て千差萬別の觀あるに止まらず、人の取扱ひ方如何によつては更に又、同種の間に於て、それと相似たる奇觀を呈して來るのが通例なのである。否々、學問の千態萬狀は、まだ之に終りを告げてゐるのではない。吾人は學問が横にも無窮、縦にも無窮なるを原則とすと述べ、同時に其の「種類」の上に一言を及ぼしたが、抑々この種類なるものが學問の内部に於て、盛んに分列式を行ひ、且つ猛烈に子孫繁殖の業を営みつゝあることなどは、未だ之を説くに至らぬのである。それから又、各種の學問を通じて、之を成立せしめてゐる大小幾多の知識が、いづれも學問の一分子として、それ相應の研究手段を煩はすの地位に立てることなども、今は詳細に物語るべき場合でないのが物足らない。殊に此の一條は甚だ大切な事である。何故かと云ふに、人の恣に取扱ふなどは別として、學問それ自身成立ちに見ると、大は學問全體より、小は個々の學問に至るまで、苟も

一學問を成してゐるものは、概ね學術研究法の全體又は之に近きものを必要とする程度の大いさを有するので、例へば讀書法以下の小研究法は、寧ろ其の全體的な研究法としての對應が多くの場合に於て困難と見えざるを得ない。依つて按ずるに、是等の小研究法は、やはり部分的な研究法として、右申す各種の學問を成立せしむべき大小幾多の知識を修得する上に適用せられてこそ本來相當と稱すべきであるのだらう。果して然りとすれば、學問の大小、知識の大小と、學問の仕方、知識修得手段の大小との釣合不釣合といふ問題が、ますます以て面倒を惹起して來る譯である。

△臨機應變の秘術を以て一刀兩斷に處置し去れ▽ 夫れ知識は千變萬化なり。之に對應すべき學問の仕方、また千變萬化を必要とするは勿論と謂はねばならぬ。併しながら千變萬化の秘術、一々之を口にし筆にして説き盡すことは、もとより人の不可能とする所。讀者宜しく「學術研究法の第一要訣」

を胸に入れ、さうして一々の場合には、いはゆる臨機應變で、如何なる大學問、如何なる小知識をも、一刀兩斷、立ち所に處置し去るの心掛けを持たるべきである。——以上は主として學問それ自身の成立及び人の目的上より學問の仕方を見たるもの、なほ之と共に、他に參酌すべき事柄の少なからざることを忘れてはならぬ。

學問の繁殖は此の如くにして無窮

こゝに理學といふ一種の學問がある。もとより學問の全體ではなくて、その一部分を成すものに過ぎない。然るに其の理學は更に分れて、物理學、化學、博物學、數學などいふ幾多の科目を生み出してゐる。かういふ現象を名づけて「學問の分科」とは云ふのである。學問の分科は際限なしに行はれる。例へば理學の中の數學は、算術、代數、幾何、三角などいふ分科を生ずる。又その中の算術は、或ひは筆算、珠算、機械算などいふ幾種にも分たれ、或ひは理論を主としたものと、應用を主としたもの二種にも分たれる。理論算術と云つたり、商業算術と云つたりするのは、即ち後者に屬してゐる。更に又、算術は其の中の分數なら分數比例なら比例を専門的に研究するといふことになる。それ／＼が一分科になつて來る。まづ此の如くにして學問の子孫繁殖は無窮たるべき譯なのである。

第八章 社會事情及び一身上の關係

第一節 學問の仕方は不斷に之を選択すべし

△宜しく「一を聞いて十を知る」の智能を練磨せよ▽ 學問の仕方は、第一に其人の眞目的、即ち將來に向つて抱きつゝある志望より富出され、第二には當面の目的とする其の學問の成立ちと大小、殊に種類、程度などに對應し得べきやうなものを選択し來らねばならぬといふ大旨は既に陳述を了したが、わけても困難な點は、自身の爲すべき一の學問を「最大の學問」として考ふる場合と、その正反對に「最小の學問」として考ふる場合との兩極端の間には、更に千變萬化の學問が比々として相列り、且つ互ひに入雜つてゐるといふ騒ぎなのであるから、その凡ての場合を引括めて、一概に之を説き去るなどいふことも、第一また容易ならぬ仕事である。それさへあるに、搦て

て加へて其の何れか一つの場合を取つて見ても、必ず一學問の中には、その全體的研究法を別として、さらに又、幾多の部分的研究法（細小なる知識修得の手段）に待つ所が集積してゐるといふ状態なのだから、ます／＼以て學問の仕方は至極面倒なものとなつて來るの外はない。が、とにかく一學問に就いては、全體としての研究法と、その部分々々たるべき小研究法と、この兩面が分けて見られる限りは、なるべく煩を避けて、之を引離して考へるに越したことはなからう。

但し此の全體としての研究法にも、部分々々の研究法にも、一樣に共通して廣い意味と狭い意味とがあることは、前に申して置いた通りだが、すべて狭義の部分的研究法を専門的に講ずる方は後廻しとするので、現に講じつゝあるのは、やはり一般的に廣義の全体的研究法を捕へての事と御承知に預りたい。

すると残るは、千變萬化の場合に對應すべき謂はゆる臨機應變の秘術を主眼として述べて行くことだが、到底、千の萬のと説き盡せるものでもなし、かた／＼吾人は第一の主義として「首脳」に規ひを掛けることにする。賢明なる讀者は宜しく「一を聞いて十を知る」の智能を鍊磨——否、發揮する上の便宜にもならうしするから、それより推考して「胴體」を判知されるやうなことに願ひたいのである。——餘事は扱措き、再び本文に戻つて申上げる。

△すべて研究法の單位は一學術を目的とする場合にあり▽ 學問に千變萬化の場合ありとはいへ、要するに學術研究法の單位は、即ち單一の學術を目的とする場合である。すべての場合は、單一の學術が目的であるか、乃至は多數の學術が目的であるかの點よりして、また之を一單數的研究と(二)複數的研究との兩種に大別する。(一)が謂はゆる「専門學的の學問」となり、(二)が「普通學的の學問」となるのであるは申すまでもない事。併し學校教育に謂

ふ「普通」も「専門」も、嚴格には何れも普通學的のものに屬すると言つて置いた。まことに吾人は初めて小學校の門を潜つた時から、直ぐに學術の複數的研究を實行してゐる譯である。斯様に二種以上の學術を寄せ集めて、一般には「普通教育」とか「専門教育」とか稱へてゐるに過ぎぬので、吾人の修めてゐる學問全體は、假りに之を一學問と看做して言へば、その實は單數的研究でないといふことは、ごく稀れな話なのである。それ故、その一學問に對する全體的な研究法としては、先づ複數の場合を考ふるの必要がある。勿論、かういふ一學問は、更に之を單位々々に細分すれば、實際は數多の學問となるので、この數多のものは、全體の一學問から見れば矢張り部分々々を成すものに過ぎないが、併し其の部分々々は、即ち個々に一學術を成してゐるのだから、この個々に對せしむべき研究法は、一學術に對する部分的な研究法では不相應な筈である——即ち個々に一學術の全體的な研究法を對應せし

めねばならぬのである。が、何れにしても單數的は複數的の中に來ることでもあり、又、狹義の研究法は、畢竟、主として單數的の各場合に就いて説くこととなるべき筋合でもあり、本論は第一に複數的の方から述べて行けば（既に然うしてゐる）よい筈なのである。

△學問の仕方は寧ろ如何様にも之を切斷して考へ且つ行ふを可とす▽右の如く吾人が修めてゐる學問全體即ち一學問といふのは、その實、數多の學問より成立つ場合が通例なのであるから、それが可成りの「大學問」——例へば中學教育及び大學教育の双方又は其の一方といふ位になると、よほど複數的研究も込入つて來る道理で、單に學問上から見たのみでも、その全體に對しては、讀書法以下の小研究法は勿論、ズット大なる獨學法などでさへ、たゞ其の一方主義を以てしたのでは多少の浮雲氣を感ぜざる能はずといふ譯なのである。それで、學問の複數的研究が段々込入つて來て、相當の大學問

たるの實を現はすに至つた場合は言ふも更なり、まだ其の込合ひ方が然ほど甚しくない場合であつても、謂はゆる一學問の中には、少なくとも個々の學術に對する單數的研究それ自身の複雑なる仕事が含まれてゐる譯でもあるし、かたゞ一學問の仕方として、終始一貫して同一の研究法を採用し且つ繼續するなどの絶對的必要は殆ど認められぬから、その學問を如何様にでも切斷して、適宜に大小かれこれの研究法を加減調合して之に當嵌めて行くやうにするのは、また以て學問の千變萬化に對する臨機應變の處置を期待し得るの所以たるべしと信ず。

△學事と世事との關係に參酌して不斷に選擇を怠るべからず▽たゞに然るのみならず、凡て學問の仕方は、その目的たる學問の上よりとすると共に、なほ他の一方に於て、純然たる學事と世事との關係を參酌しつゝ、常に之が選擇に注意を拂ふことを必要としてゐるのである。一學問の仕方を以て、必

すしも終始一貫したものと爲さず、別に又、其等の關係に參酌して、あたかも一種の『寄せ木細工』を作らんとするやうな考へを持つてゐることは、その學問に着手した時と終りに近附いた時とを問はず、不斷に怠るべからざる重大な心掛けの一であると言ふを憚らぬのである。以下、専ら右いふ學事と世事との關係に移つて、少々お話しを試みよう。

第二節 學事と世事との關係を參酌すること

△一は社會事情殊に教育制度、一は一身上の關係▽ 學事と世事との關係として論すべきものは多々あるので、かの學問の仕方に就いての經濟問題であるとか法制上の問題であるとかいふ類のものも、やはり此の中に含まれて來るのであるが、今、之を大別して見ると、一は社會事情、一は一身上の關係と、ザツト斯う兩方面に分けられようと思ふ。が、第一の社會事情は、まづ

主として學術教育界一般、殊に教育制度を中心としたものを指すことになるので、その以外は第二の身上關係の方へ結び着けて考へたら宜しからう。何れにしても學事世事の關係全體に互るの講述は、無論、この一章にのみ收まらざるべきものでない。こゝには唯だ其の一斑に就いて言ひ、聊か讀者に之が「暗示」を提供せんとする次第である。

就中、社會事情の方は最も廣汎な問題となるものだし、自然また他の章中に出て來ることも多い譯だから、今は主として身上關係の側を觀察すること仕よう。

△即ち是れ應用的研究法即ち主觀的研究法▽ 學問の目的も大切だが、之を修める人の身上關係に至つても、亦なか／＼重大な事柄であるのは、蓋し多言を要せざる位なものであらう。それが學問の仕方を左右することは、決して少なくない。寧ろ通學法、獨學法などの外に、なほ一身上の事情や何か

を標準として、學問の仕方全體を區別するの途があると謂つても不可はないのである。

蓋し通學法、獨學法の區別も、また一面より之を見れば、即ち一身上の關係よりした分類たるの觀が無いのでもない。勿論、人の身上關係よりした研究法の區別といふことになる、所謂「十人十色」で、各人の採用すべき方法は一々相同じからずと申すべきである。否、實際は然うならねばならぬ。けれども、一人々々の話は、いはゞ「研究法の應用」に屬して來る。即ち應用的研究法又は主觀的研究法と稱すべきもので、もとより其の詳細は、各人の智慧判斷によつて之が解決を期すべきである。逐一に人別の研究法などを説いてゐた日には、全卷を掩うても猶ほ足るべきではない。だから、委しい事は省略して置かねばならぬが、併し唯だ此の身上關係なるものが優に學問の仕方——殊に實際問題として——を區別するに足るの點だけは、また輕々

に看過すべからざる事と思ふのである。

△第一は學問の目的、第二は一身上の關係▽ そも／＼一身上の關係に基いて研究法の適否を判することは、實際上、殆ど學問そのものに就き選擇を試みる場合と甲乙がない位に、各人の慎重なる考慮を必要とするのがある。これに依つて、各人の採用すべき研究法は、或ひは通學法ともなり、或ひは獨學法ともなり、又、或ひは兩法を折衷したやうなものともなつて來なければならぬ。殊に謂はゆる獨學者の如きも、その大學問を目的としてゐる場合若しくは他の場合に於て、必ずしも全學問を通じて獨學法を以て一貫する必要もなし、時には其の不可なることもあるしするから、斯かる時には獨學が程度問題といふことになつて來る。この程度如何を決定する上に於て、第一は矢張り學問の目的からも考へねばならぬが、第二には又、差詰め身上關係を以て其の主たる理由とせねばならぬのである。否、實際問題としては、

一般に其の何れが第一とせられ、いづれが第二とされてゐるか、殆ど分らぬ位だらう。——併し人の目的は寧ろ一たるべしと雖も、研究法は必ずしも一を限りとしてゐない。大切なのは「手段」よりも其の「目的」である。その目的に代へてまでも學問の仕方を選ぶことには、容易に賛成の意を表し得ないのだ。

△各人の境遇又は四圍の状況に適應せしむること▽ 遮莫、ひとり學問の仕方のみならず、凡そ人の此世に處すべき要訣の一は、即ち各自の境遇又は四圍の状況に適應したるやうに一身を振向けるといふに在るので、諺に謂はゆる「順風に帆を揚げる」とは、蓋し此の事だ。若し夫れ之を思はずして「精神一到、何事か成らざらん」など言ひ、己が一身の事情如何を顧みぬ位は未だしもの事、大は社會一般の事情から、小は自ら持つて生れた性能の向不向をも忘れ去り、さうして「及ばぬ鯉の滝登り」といふ底の、餘りに大なる志望目的を起し、唯だ其の手段のみ最善なるものを採擇して、一圖に之を打貫かんとするの意氣込みを示しつゝあるが如き人に至つては、かへつて其の處世の術に暗きことを表はしてゐるものと謂うても不可ではない。苟も社會の人たる以上、各方面の事情を參酌して一事を行ふの要あるや勿論であらう。

第三節 通學か獨學か夜學か苦學か

△學校に入るか入らぬかは是れ人生の大事▽ さきにも言へる如く、通學法と獨學法とは、また是れ應用研究法の二大別である。と解しても差支ないのである。前者が「學校に於てする研究法」であり、後者が「家に於てする研究法」である。と云ふのは、やはり一面に於て人の身上關係の相異なることを意味してゐる。ところで、普通の學校生徒などは、まるで學問を本業としてゐ

るやうなもので、學業か職業かの觀あるの一事は、寧ろ専門の學者(單に「學者」と云ふと、「學修者」と同義に解されることもある)に準すべきものである。さうして其の實、彼等は單に學校に於てするばかりでなく、その傍ら又我家に於ても之に従事するの暇を有してゐる。且つ加ふるに學校は、もとより何の點から見ても教育機關として、まづ申分なく出來てゐる筈のものであるから、之に就いて學ぶのは、研究方法としては最も樂でもあらうし、又、何かに付けて便宜が多くて利益でもあらが、併し其れだけに生徒は學校に對して、最も高い代價を拂はねばならぬことになる。まづ第一としては「こゝが思案の仕どころ」である。

それは常に金錢の問題たるには止まらない。授業科を始め其他一切、金錢を以てするものは言はずもがな、之と共に人の有する時間も勞力も餘分に費さねばならぬことになる。然るに、世には一身の事情が此の金錢、時間又は

勞力などの不經濟を許さず、或ひは之を敢てすることに困難を感じる者が決して少數ではない。とりわけ一定の年限だけ全く學業に身を委ねるなどいふことは、すこし深く考へて見ると、これ既に處世上の一大事——否、人生の大問題だ。

國民普通の義務教育だけは是非に及び難いが、その以外に於ては學校に入るか入らぬからの問題からして、先づ篤と其の利害を考へて見る必要がある。當面の目的からも考へ、眞個の目的からも考へ、それから深く一身の事情をも顧みたと上、さて究竟の利益は何れに在らうかと判斷して見なければならぬ。もし強ひて學校に入らんと欲すれば、敢て入り難きに非ず、されど其れは餘りに不經濟だ——若しくは不得策だと云ふやうな場合が、また少なからぬ筈である。譬へば「流れに従ふは腐魚のみ」といふ格言もある位で、たゞ徒らに人眞似をして學校に這入るなんかは、到底感服の出來た話ではな

い。

△本業の餘暇を以てする者及び學費の不足なる場合▽ まして況んや學校教育を経ず、直ちに社會の人となつた爲めに、今や「學業」よりも第一肝腎な「本業」を別に有してゐるといふ向の者に至つては、その現在の境遇上よりすれば、何としても本業の餘暇を以て學問を修めるより外に仕方がない。もしや又、之に充つべき時間もあり、努力も持つてゐるが、只一ツ金銭ばかりが不足だとあれば、この方は寧ろ未だ學業の方を主として従事することも出來得る餘地が存してゐる。それには苦學の如き方法もあることだ。併しなから學問のために其れだけの犠牲を拂ふさへも猶ほ忍び難しとするの事情があるとするれば、どうしても普通の學校は思ひ切るの外はない。勿論また本業の餘暇でする學問の仕方に、かの夜學に通ふなどいふ一寸便利な——但し簡略した方法ある。自身の住居してゐる場所の附近に適當な夜學校があり、且

つ所要期間を通じて繼續通學の出來得べきものならば、此種の機關——然り苟も學術の教授をなす所たらば——に依つてすることも、確かに一策である。が、さういふ機關を利用することも六ヶ敷いか、又は餘り思はしくないといふ日になると、いよ／＼以て學校的機關に依るの途は絶えて來る。さうして通學法が採用し難くなればなる程、その代りとして獨學法がヨリ多く採用されねばならぬ勘定となるのは當然である。たゞ通學と獨學と、敢て其の何れかを以て一貫せんとするものに非ずとすれば、こゝに又、兩法の調合問題が起る譯だ。即ち通學の程度如何、獨學の程度如何、これは世人の想像より以上の重大問題であらねばならぬ。

△普通の通學、獨學と夜學、苦學との取捨また問題▽ 右に擧げた中、夜學は言ふまでもなく通學法の側である。が、苦學は通學獨學の双方を通じて行はれる。殊に苦學の方は一身上の事情が聊か他と異なるより生じた一種特

別の方法と看做してよい。何れかと云へば通學法を採らんとする者が多く、それには學費が缺乏してゐるため、之を得るの目的で職業に就き、その餘暇を以て學校に通ふといふやうなことになる。この場合は明かに通學法の一つである。但、その身上關係は直ちに學校に就くを許さず、純然たる學問にとつては大いに不要なる手段を強ひて採らしめる。職業に就くとか勞働するといふのは、半面生活のためになるが、半面は全く犠牲に供せられる手段となるので、普通の學生と同様、本業は寧ろ學問にあるから、かの本業の餘暇のみを割いて學業に充つる獨學の場合とは、その主とし従とする所が相反對してゐる。なほ右とは異なり、苦學同時に獨學たるの例も稀れには見出される。夜學といひ、苦學といひ、純然たる學問の仕方に就いて見れば、特に變つた點は少ないのだが、廣義の學術研究法上から其の利害得失を考究する日になると、又これ優に一問題を成すに足るのである。が、此所では暫く追求することを見合せて置く。要は通學、獨學、或は夜學、苦學などの取捨選擇が最も慎重に行はれんことを希望する者に過ぎない。

第四節 一身上の關係も千變萬化

△獨學者の身上關係は殊に區々町々▽ 次ぎに「我家に於てする學術研究」といふ其の「家」に就いて見ると、これは廣く住所を指したのだが、さて此の住所との關係より人の境遇を観察するならば、驚くべし、やはり「千變萬化」が跣の有様である。第一には自身の家に在るものと、他人の家に在るものとが區別される。それから自身の家に在る者も、或ひは戸主たり、或は家族たりで、その身分が一樣でない。又、他人の家に在る者とても、例へば下宿の如きは、まづ自身の家に準すべきものであるが、食客などは餘程、相違し、更に雇人となれば一層徑庭が生じて來る。家との關係も斯く町々なも

のだが、その他なほ色々な事がある。これは殊に獨學者に於て然る點であるが、各自は本業とする所の職業が同じくない。貧富の程度が同じくない。年齢も、身體の健康も、氣質も、教育の程度も、また必ずしも同じくない。更に眼を一轉して各人の四圍如何と顧みれば、土地の狀況であれ、風俗であれ人情であれ、近隣から家内までの様子であれ、何れにしても似寄つた所ばかり多いといふ筈はなからう。かくの如くに詮じ立つれば、普通の學校生徒は格別、我が住所に於てする研究者即ち獨學者などの身上關係は、恐らく千變萬化といふ形容詞も猶ほ足らぬ位になる。

△金錢、時間、勞力の如き無形の資本額如何▽ さうして之に應じて一々差異を生ずべきは、即ち各自が學術研究のために提供し得る金錢、時間、勞力などいふ無形の資本額である。各自の研究法は、第一まづ此の資本額から割出されて來なければならぬ。仕儀によれば夜學も結構、苦學も可なり、

身上關係が千變萬化なら、學問の仕方もまた例によつて千變萬化の秘術を盡し、臨機應變、たゞ其の宜しに従ふを以て旨とすべしである。——要するに社會の事情なり、一身上の關係なりが、ますます複雑し來れば來るだけ、それだけ學問の仕方をして之に適應せしむるやうに、一層微細に互つての手配りが眼目たるべき事と、斯う心得るに若くはあるまい。

法制問題——例へば試験制度——と獨學者

醫者になるには、帝國大學の醫科か、各地方の醫學專門學校を卒業しなければならぬ。開業醫と云つて、醫術開業試験を受けて合格した者が免許を取る途もあるが、この制度は近く廢止になる事の事である。醫科大學へは、高等學校を卒業した者でなければ入ることが出來ぬ。高等學校や、官公立の專門學校へは、中學校の卒業者、もしくは專門學校入學檢定試験合格者でなければ入ることが出來ぬ。かういふ事は法令に規定されてゐるのだから、何さしても之には従はなければならぬ。學問に關する法制の問題といふのは、即ち此種の事を指したので、何でも法制の存する限り、之を無視しては、學問が仕送げられぬ譯と心得べきである。だから、修學者の目的如何によつては獨學一點張りでは通されぬ。此邊の事を能く辨へて置いて、獨學者は獨學者の行くべき途を行くやうにするが肝要だ。

第九章 事實と理想との學術研究法

第一節 學問の精神とは何ぞや

たとへ學問の仕方は絶えず其の選擇に注意を拂ひ、大小各種、ひたすら最善なる研究法——とばかりに、相繼ぎ引繼いで之を採用してゐるやうであつても、なほ能く顧みれば何處かに目的たる學問と不釣合な點があるとか、乃至は社會の事情や一身上の關係に照合せて非とする所があるといふのでは、未だ十二分の効果を期待し得べきでないと同様、こゝに今一つ併せて慮らねばならぬ重大な事柄が残つてゐる。それは何かと云ふに、學問の目的や社會の事情などよりも、まだ少しく無形的に考へられる「學問の精神」然り、學術研究の精神である。精神とは云つても、學問の意義や何かの事ではない。丁度「學問の目的」が其の實、人の目的を指してゐるやうに、學問それ自身

には精神なし、やはり人の精神といふに等しくなるのである。夫れ法は死物なりとある語の如くで、こゝに最善なる研究法の千に達し萬に滿つるものが羅列されたからとて、よく之を活用し、遺憾なく其の機能を發揮させるに足る底の熱誠と、さうして鞏固なる意志の力とがあるに非ずんば、殆ど用を爲さない。更に根本的精神としては、その熱誠、意志の力に命令を與ふる最高の權威「理性」が嚴然として頭腦の中樞に君臨してゐるに非ずんば、未だ法の存在は大なる効果を現はして來る筈がないのである。即ち知る、謂ふ所の人の精神とは、主として其の支配者たる理性の指示せんとする方針でなければならぬ。換言すれば學術研究の精神——それは要するに、かの廣大窮りなき學海に船を遣る人の、依つて以て進路を解すべき磁石であるといふに歸着する。

第二節 一面は被教授法、一面は自修法

▷ 通學法 + 海峽通商法 || 通學法 || 通商法 ▷ 却説、普通の學校又は之に類似の教育機關に依つてする學術の研究法、即ち畧していふ「通學法」と、世に謂はゆる獨學者のする其の研究法、即ち「獨學法」との差は、詮する所たゞ學術の教授を受けるか否かの一點が、その特別に目立つた所であるに過ぎない。通常の解釋に従へば、抑々「獨學」とは「師に就かずして學問を獨習すること」(金澤博士編纂「辭林」に依る)である。師に就くは其の教授を受ける所以の途たり、而して他人の教授を受けず、學問を獨習し自修すること。これなん一口に人の稱して「獨學自修」といふ仕事に外ならない。反之、通學法にありては其の「教授」を眼目としてゐる。さうして教授實は被教授(研究者の側より言へば「教授される」也)といふ一種の小研究法を含有すると否

とが、實に通學法と獨學法との境界を成す。しかも兩法は何れが果して比較的大なる研究法なりやと稽ふるに、そは寧ろ通學の方であると謂はざるを得ぬ。蓋し通學法の成立要素たる小研究法は、決して一の被教授法に盡きたりせせず、否、その有らゆるものを網羅してゐるのである。そも獨學と非獨學とは自づから學術研究法の二大別を成し、而して其の一方たる獨學の中には唯だ被教授法の一種を除ける以外、讀書を始め其他すべての小研究法を包含して來るものであるが、併し之と同時に、片方の非獨學即ち通學法も、また獨學法の成立要素たる凡ての小研究法をば其の中に取入れることを不可能としてゐるのではない。眼目たる被教授法は言ふも更なり、讀書法その他、ありと有らゆる學術研究法の成立要素たる小研究法はいづれも是れ學校の生徒が採用するを許されざる所に非ず。例へば獨學の一名を「我家に於てする學術研究」とは稱すれども、しかも通學生一般に主として學校に於て其の教

授を受くるの傍ら、また我家に歸つて「自修」するを例としてゐる。更に又かの通信教授の如きも、之に依つてするは即ち一種特別の被教授法にして、ひとり今日の獨學者は之を有すと語り得べきに似てゐるが、その實、早稻田大學其他の學生間に實見せられる如く、矢張り一種の研究手段として通學生が講義録を購讀するの例は、必ずしも稀れとせぬのである。要するに獨學の獨學たる所以は唯一の被教授法を缺くに止まり、この一法を除外して言へば通學法と獨學法との間には、何等その成立要素の相異なる所を見出し得ずと斷定するの外はない。果して然らば、獨學法に一の被教授法を加ふれば立ち所に變化して通學法となり、又通學法を自身は直ちに以て學術研究法の全體を成すものと見ても不當ではなからう。

△通學法より被教授法を引去つた残りは矢張り獨學法▽ 此に於てか、かの學術研究法全體を大別して獨學と非獨學との二種とする如きは、たゞ徒

らに世間の慣用語を尊重し、反つて其實の空虚なるを庇ふの弊に陥れるものと稱すべく、左にも右にも此の分類は、ますます不徹底なりとの譏りを免れる譯には行くまい。畢竟するに、通學法は學術研究法の一部に非ずして、その儘、學術研究法の全體である。さうして其の一部たるは被教授法といふ一種の研究手段で、學術研究法の全體即ち通學法より唯だ此の手段のみを去つた残りの大部分が、これを概括して獨學法といふ其の大名目の下に包含せらるべき諸種の研究手段であると仕なければならぬ。故に、もし學術研究法を大別して二とし、その一種を獨學法と呼ぶことにすれば、他の一種——非獨學法は即ち被教授法なりと、斯う直ちに云つてしまつた方が寧ろ正鵠に近いのである。いはゆる通學法に至つては、被教授法と獨學法（被教授法以外、一切の研究手段）とを併せて之を有す。即ち「通學法」と「獨學法」とは、寧ろ兩々對立せしむるを可とするものではない。

△學術の教授を受くる一面と自修即ち獨習の一面▽ 夫れ通學法は學術研究法の全體に外ならず、その一面は學術の教授を受くるにあり、他の一面は自修即ち「學問を獨習すること」に在りとするれば、その獨學法と比較して、いづれが果して大なる研究法たりやの如きは、もはや之を問題とするの要がない。さりながら、吾人は是れまで獨學法と通學法を對等の地位に立てるものと看做し、常に彼此比較しつゝ來た者である。それと云ふのは、畢竟また好んで世間一般の解する所に逆抗するを避け、なるべく通學法といふ方を狭い意味に——然り、殆ど「被教授法」そのものと選ばぬ程度に取つてゐた譯であることを告白して置かねばならぬ。もし其の如く通學法を直ちに「非獨學法」即ち被教授法なりと考へて置くだけに止むれば、やはり其の通學法と獨學法とは何れが比較的大なる研究法であるか知り難し——否、ごちらかと云へば餘程獨學の方が大なりと心得てゐるのだ。けれども普通學校の生徒が

する學問の仕方ば、唯だ教授を受くるの一段に在りとのみ見てしまひ、全然彼等より「自修」の特權を剝奪し去るなどの不法は敢てし難きのみならず例へば、現に「學問の獨立——自修的研究」といふ一項を以て三大教旨の中に加へてゐる早稻田大學の主義主張や何かも、あはれや無意義なものど之を化せしめることになる如きは、到底吾人の忍ぶを得ざる所である。それ故、これまで言つて來た通學法は、其實寧ろ廣義の被教授法である——さうして又、依然として之を通學法と呼ぶべくんば、他なし狹義の通學法なるもので若し夫れ廣義の通學法に至つては、直ちに學術研究法の全體と其の意味を同じうするものであると、此所で明瞭確然と斷つて置く必要があるだらう。

△獨學者ひとり獨學し學校の生徒は獨學せずとする誤解▽ 依是觀之、學術の教授を受くると其の自修とは、即ち學術研究法の全體であつて、その二大別を成すは取りも直さず(一)被教授法即ち非獨學法と、(二)自修法即ち獨學

法であるが、この兩法を併合し、以て學術研究法の全體と爲して之を採用しつゝある者は、他なし、普通の學校生徒とす。その(一)は學校生徒の獨占する所であるが、(二)は必ずしも獨學者の専有を許さない。換言すれば、學術の教授を受けるのは學校の生徒に限る(學校の中に類似の教育機關を含めていふ)が、獨學は獨學者もするし、同時に又、學校の生徒もする。たゞ單に獨學ばかりといふのが獨學者で、その上に被教授法を附すれば學校の生徒となる――これだけの相違があるに過ぎない。こゝに至つて、吾人は世に一大誤解の存するを思ふ。それは外でもなく、學校の生徒は獨學を爲さざる者の如くに云ひ、さうして獨學者は獨學者で、また其の反對に、天下唯だ獨學をなす者は我徒あるのみと稱するの風、豈に之なしとせんや。もし然らば、少なくとも獨學者に獨學思想の皆無なるを嘆息するの外ないのである。

第三節 普通の學生また自修により理想に到達す

△彼等は「自修法」を有せりや「獨學法」を有せりや▽ 以上に重複を顧みず學術研究法の全體が概括して謂ふ獨學法と被教授法との兩部分より成立たざるべからざる所以を述べた次第は、やがて其れが「學問の精神」と一致して來らねばならぬ筈だからである。學術の教授を受ける事と自修とが兩々對立し且つ併合して、こゝに初めて學術研究法の全體が成立つといふことは、早い話が「なるだけ其の一方を缺かぬやうにせよ。いはゆる具足圓滿の學問――理想の學問は、その双方に待つ所があるのだ」と、かう人に警告を與へてゐるやうなものであらうと思ふ。まづ一般の學校生徒を通じて最大の缺點と目せられてゐるのは、畢竟、その自修的精神が足らぬことである。それだか

ら、學問が自動的であるよりも他動的の方に傾くのである。彼等は師に就いて其の「教授」に依頼し過ぎる弊に陥る。その教授を受くるに當つて、歴々とした「被教授法」を有してゐるやら居ぬやら、それさへも疑はしい。假りに立派な「教授法」が師の側にあるから、生徒の被教授法は全く不要なものと看做しても、あとに残る一つが更に疑はしい。彼等は果して「自修法」を有するや否や——さなくば確個たる「獨學法」を有するや否や。知らず、彼等自身は如何に答へんとするか。

△その自修が矢張り「教授」の配下にある自修では不可▽ 勿論、早稻田大學の例に見る如く、學校の方が先立ちとなつて大いに自修的研究を奨励してゐることもある。いや學校生徒の依頼主義は吾人も幾度か述べてゐるやうに既に久しき以前から識者間に其の弊害が認められてゐることだし、今では早稻田大學に限らず、凡て中學程度からの上の學校では大抵生徒に向つて自修

的精神を鼓吹する主義であらうと思ふ。が、教育者の側は扱措き、生徒一般に如何程この自修といふことに就いての了解があるか、自修即ち獨學なりと深く心得てゐる所があるか何うか、それから實際に於て又、彼等は如何なる程度の「自修即ち獨學」を行ひつゝあるものか、その邊も悉く不明に屬してゐる。言ふまでもなく彼等自身に「自修」を口にするには有らう。意義さへ等しければ何も「獨學」と言ひ直すには及ばぬことだ。併し其の自修が矢張り「教授」の配下にある自修と云つたやうなもので、例へば一度教授された所の複習に止まつてゐるなどでは、未だ是れ眞個の自修に非ず、獨學に非ずと謂つべきである。もし彼等にして眞個の自修即ち獨學の意義及び其の必要を了解し、而して日夜を分たず之が實行に力めたらんには、それこそ成績の驚くべきものがあるに相違はない。

△彼等にして之を遂行せずば理想に到達すべからず▽ 更に又、眞實彼等

が學校時代に於て自修を行ひつゝあつたものなら、その學校を卒業した曉、學校教育以上又は以外の學問に對する場合となつても、たゞ以前の自修を繼續するに過ぎない譯となるだらう。もとより學校教育以上又は以外の學問に對しては、片方の被教授法のみを以てせんとしても不可能なことは分つてゐる。嘗て通學法が此の場合に於て役に立たず、唯だ獨學の一途あるのみと言つたのは、即ち通學法を狹義に解したからである。しかも通學法を以て被教授法のみを終るものとし、その一方に自修法即ち獨學法を有し得るものなることを認めざる限り、斷じて學校の生徒にあつては學術研究法の徹底すべからざることを覺悟しなければならぬ。彼等の學問をして理想に到達せしむるの途は、曰く被教授法と自修法とを共に遂行すること、換言すれば其の非獨學と獨學とを徹底せしむるに在り。若し夫れ彼等自身その固有の「獨學」を閉却する如きは、また求めて「理想の學問」に背馳せんとするの所以

たるを三思すべきである、三省すべきである。

第四節 理想の獨學法と獨學者の教育的觀念

△情意のみ旺盛にして無智なる獨學は成就せず▽事實上、學校の生徒は被教授法と獨學法とを共に採用し踐行し得べき地位に在りながら、被教授法の大部分と、さうして唯だ獨學法の一部しか實行してゐないものと謂つて然るべきだらう。それ故、理想としては双方共に其の全體が遂行されることを必要とする。之がためには、現在より以上に彼等の自修的精神を旺盛ならしめ、學校に於て教授を受くるの以外、いはゞ「獨學主義」の如きものを樹立させて、この旗印の下に進軍させる位でなければいけまい。ところで、彼等とは正反對の缺點を有せるに似たのが、即ち一般の獨學者である。被教授法を採用せずして、獨學法一方で行くといふのが、あたかも最初からして學

術研究法の一半を擲つて掛かる者の如くにも見える。それは未だしも、餘の
一半たる獨學法が果して如何の鹽梅に實行されてゐるのか、蓋し大いに危懼
なきを得ない。勿論すべての獨學者は、疑ふまでもなく自修の實行者を以て
自任してゐる人々であらうから、敢て此の人々に向ひ、事新しく自修的精神
だの獨學主義だのを鼓吹するの要はなかりさうに思はれる。併し主として其
れは獨學といふことに對する衷心の熱誠であるとか、飽くまでも之を實行し
て、終に目的を達せざれば止まじとしてゐる其の意志などを忖度したものに
過ぎない。いはゆる「情」と「意」に於ては不足なきものと看做して、さて
残りの「智」は如何であらうか。それは即ち獨學を了解することである。「獨
學思想」である。

之を被教授法に見れば、最初よりして其の「教授」が學生に智を與へる。
たゞに目的たる學問だけの知識には止まらない。學問の仕方もまた併せて教

授される譯なのである。それでも未だ學生自身に確個とした學問の仕方が無
いからいけぬと謂はれる仕儀なのである。さういふ學生に引較べて考へて見
ると、獨學者は丸で無智の學問を始めるやうな所が無くはないかど氣遣はれ
る。何であらうと、情意のみを有したのでは、大きな仕事の成就は覺束ない
だから、獨學者には「學問の學問」殊に獨學思想が最も必要だらうと言ふの
である。

△獨學法を大にして學術研究法の全體に同じからしむる工夫▽ 獨學思想

とは、即ち獨學の理論である。獨學法と其の理論とは、これこそ吾人が本書
一卷を通じて力説を試みつゝある所の主題に外ならない。蓋し有らゆる點よ
り見て、學問の仕方の研究は、普通の學生よりも一般の獨學者にとつての方
が幾段か其の必要は大なりとしてゐるのである。既に

(獨學法) + (被教授法) = 通學法 = 學術研究法

と、假りに方程式の形を以て示した所を一目しても明かなるが如く、學術研究法の成立要素中、殊に重大なるべき被教授法の一を缺いてゐることは、何としても獨學法の最大弱點たりと認めざるを得ない。この一大弱點の存するが故に、獨學法の研究は、また最も必要な事となつて来る。通學生たる獨學生たるを問はず、學問の仕方は「具足圓滿」を以て理想としてゐる。ひとり其の獨學者にあつて最初より重大なる成立要素の一を缺き、全體の學術研究法から被教授法といふものだけがマイナスになつてゐる所は、あたかも優勝者割引を附せられて他人の後から駆け出す競走者に似て非なるもので、事實に於ては寧ろ「二人三脚」の如く、その足を縛られて自由に駆け出されぬと云つた體もあるのだし、かたゞ決勝點に着くまでが、普通の學生よりも一倍骨の折れる仕事であることを豫期して掛からねばならない。それで種種の問題も起ることになるが、按ずるに、獨學者のために最要の工夫は、如

かにせば其の獨學法をして學術研究法の全體と相等の大いさを有せしむるを得べきか、こゝに思ひを凝すに若くはなからう。言葉を換へていへば、最初よりの不足たる被教授法を補ふの策如何である。この無に代ふに他の有を以てすれば、即ち獨學法は學術研究法の全體に匹敵して來る道理である。さうして其所に、獨學法も亦これ理想の學問に接近せることを跨り得べき場合が生じて來なければなるまいと思ふ。

△第一は獨學法と被教授法との折衷案▽ 獨學法をして學術研究法の全體に同じき大きさを有せしむの途は、別に變つたものがある譯はない。それは唯何か或物を獨學法に寄せ合せるより仕方がないのだ。被教授に代ふるにXを以てする策があるばかりだ。吾人は數學的に此のXを見出して來れば可いといふものだらう。併し聊か失望を禁じ得ないのは、まづ獨學法それ自身を解剖して見ても、被教授法の穴埋めとし、見事に其の代理を勤めさせるに足る

だけの、至極恰向と云つたやうな小研究法が搜し付かぬ事である。第一、讀書法がいけす——と云ふ理由は後に至つて詳述するが——その他は推して知るべしである。そこで吾人は、こゝに二種の案を提出する。その一は、これ迄にも言つたことのある獨學非獨學の折衷法である。やはり獨學法に被教授法を加味するので、二つが合して研究法の全體を成すは勿論の事、これは理論上よりしても、はた實際上よりしても、確かに最善策の一たるを信じて疑はない。

思ふに獨學者は其の獨學を耻とし、不名譽とするなどの必要は毫もない。けれども又、その獨學を以て終始一貫することは必ずしも功名手柄だの、利口だの、得策だのと、一概に定める譯には行かないのである。女子が貞操を守ると同筆法で、故なく獨學に戀着してゐるなどは、未だ眞個に獨學をも學問をも了解してゐる人と謂はれない。兎に角、部分よりは全體が大切、獨學

よりは學術研究法の方が大切なのである。

△第二案は通信教授に依り講義録を購讀するの法▽ もつとも獨學非獨學の合併は、その儘、學術研究法の全體となる譯で、もはや獨學法を超越したものと見るべきであるが、第二案は聊か之と違ひ、やはり獨學で押して行かうとする方法である。それは即ち通信教授に依り、講義録を購讀して學問を修めんとするに在るので、また一種の研究法たるを失はない。しかも普通の讀書法よりは一步進んで、寧ろ被教授法に接近したものと見ることが出来る。この方法に就いては最後に極めて詳細なる陳述を試みる考へだが、何に致せ今日の獨學法としては、これが最も進歩したものであり、最善なものでもあると信じて疑はない。蓋し通信教授は一種特別の「教授」と考へ得られるものである。普通の學校教授が「舌の教育」ならば、通信學校（講義録の發行所を總括して斯く稱して置く）の其れは「筆の教授」と見るべきで、よほ

と似寄つた所がある。要するに、獨學法の中から被教授法の除外されてある缺點は、之に依つて少なからず補はれるだらう。

△獨學非獨學の接近は理想境に到達せるなり▽ 但し通信教授が一種特別の「教授」であることは、同時に又、之に依つてする獨學法が一種特別の被教授法であるやうな性質を帯びて來ることを意味してゐる。獨學非獨學の接近せる事實といふは、即ち此の事である。こゝに至つては、獨學と非獨學との差は最早や間一髪を止むるのみと云ふよりも、寧ろ其の相類した「教授」の上に於て共に同種と化したものと看做してもよい位なのである。然り、普通の被教授法と、一種特別の被教授法とを、同類の研究法と見る時は、純然たる學術研究法としての通學法と獨學法とは、全く其の成立要素を等しうして來るのであるから、もはや其の間に大區別を存するの要なく、獨學は其の主とする意義を失つて、殆ど事實的に學術研究法の全體と無差別になつたもの

と稱するも、敢て不可なることはなからう。そも／＼是れは獨學の墮落であらうか。否、正に其の反對で、昔よりして不斷に行はれ來つた獨學の進歩が今日おのづから此の理想境に到達し得たものと謂ふの外はないのである。それが何故に理想境であるかは、上來述べてゐる所から容易に之を判断するところが出来よう。即ち知る、通學法は獨學法を併せ、獨學法は被教授法を合し、いづれも學術研究法の全體を組織することに依つて、相競ひ相争つて「理想の學問」をば實現せんとしてゐるものに非ずして何ぞや。

△獨學者は學問の觀念よりも寧ろ教育の觀念を有せず▽ 殊に又、獨學法に被教授法を加味するの必要は、殊に其の獨學をして眞個に教育的ならしむるの上に於て、最も切なるものありとすべき理由がある。他なし、獨學は師に就いてせざる學問であるだけに、おのづから自由放任、不羈放縱の傾きを生じ、つまり非教育的に終始して、嚴正なる學校教育から見ると大いに異な

る効果を擧ぐるやうなことに成り了らざるの限りではない。されば、學校の生徒には自修的精神の鼓吹が必要とされる如く、獨學者にも教育の觀念を注入することが必要であらうと思ふ。それらの缺點は、即ち兩者の最大弱點（一は教授に依頼し過ぎ、一は全然教授なしで行く）を意味してゐるからである。就中、獨學者は其の獨學が「自らする教育」(Self-education)であり「自らする修養」(Self-culture)であり、同時に又「自らする學問」(Self-study)即ち自らする學術研究であることを忘れてはならない。いはゆる獨學思想は、一面が學問の觀念で、他の一面が教育の觀念である。さうして教育の觀念は、殊に一般の獨學者が閉却するに馴れてゐる所ではなからうかと思ふのである。

第五節 精神上よりしたる獨學非獨學の差別

吾人は「理想」を説くと雖も、決して「空想」を語つてゐるのではない。

通學法が誠は既に獨學非獨學を併合したものであり、さうして又、獨學法が被教授法を加味することによりて學術研究法の全體と同化を來しつゝあるは唯これ事實的に現はれてゐる所の状態に外ならぬのである。中にも獨學の側に於て、なほ其の非獨學と區別せらるべき一縷の命脈として、わづかに普通の教授に依ると、一種特別の教授に依るとの差を存するに止まれる如き、寧ろ直ちに此の點を以て、獨學非獨學の區別を撤廢し去るの理由とした方がよいかも知れない。かくの如くにして今や獨學の獨學たる所以は、少なくとも其の方法（殊に學術研究の成立要素）に於て自然に消滅しつゝあるの觀なしとせぬので、こゝに至つて、甚だ重大なる地位に立たざるを得ないのは、その方法に就いてした根本的區別よりも、寧ろ獨學の側、非獨學の側、それぞれに屬してゐる人々の精神上の差異に基づく所の區別が、即ち是れであらうと思ふ。早く言へば、通學——否「被教授」を重しとするか、之に反して自

修を重しとするか——被教授主義か、獨學主義か、その何れに多く傾かんとするかといふ、根本の思想問題に歸着するのである。斯かる思想の相違は言ふまでもなく事毎に現はれて来て、大いに又、學問の仕方を始め、終には學問の効果を左右するに至るのが當然であらねばならない。之を一言に掩へば、獨學は其の方法に於て通學に一疇を輸し、通學は其の精神に於て獨學に一步を譲るといふ點が、深く玩味すべく、深く記憶すべき所ではないだらうか。

獨學者が個人教授に依る如きも通學獨學併用の一法

世には『個人教授』と稱へて、何かの學問を一人々に教へてゐるやうな所がある。獨學者が其の修むべき學問の一部分を、この個人教授に依つてする如きも、確かに一方法たるを失はない。例へば英語を學ぶとする。大抵は獨學で不都合なくやつて退けられるが、少なくとも發音だけは何人か教師に就いた方がいゝ。講義録や何かの上で、目で讀んだばかりでは、本統の發音を覺えることは至難だ。云ふやうなもので、獨學と通學との併用は其の利益が少なくない事であるから、出來得る限りは獨學者も通學の機會を捕へて、その不足とする所を補ふに若くはない。

第十章 獨學の眞義並に不相應なる

獨學者の疾患

第一節 何れの途よりするも學問の仕方全體

第一章以來、ながく學問の仕方全體に互り、殊に其の主として『教授』に依るもの即ち通學法と、その然らざるもの即ち獨學法とを以て、いはゞ一蛇の兩頭であるかの如くに看做しつゝ、寧ろ概括的に之を論究する方に傾いてゐた次第だが、倍、漸くにして前章に入るや、更に兩法を一括して、これを『理想の學問』に結び着くるに及び、一方にあつては通學法もまた一部の獨學即ち自修なる方法を其の中に含むのが既に事實たること、他方にあつては獨學法自身も亦その如く、最も進歩したるは一種特別の通信教授なるものに依るあり、しかも最善の策は之に止まらずして、矢張り眞個の教授に依るの

折衷案さへあるべしと云ふに歸着するの段とはなつた以上、少なくとも純然たる學術研究法として之を見るに、もし果して其の理想境に到達し得べくんば、通學と獨學、その何れの途を採つて進んで行くことにしても、要するに非常大なる徑庭はなかるべきの理と、結局かくの如くに心得て然るべしである。従つて吾人は是れより以下、専ら獨學主義の方に向つて觀察を鋭くし、更に急轉直下、ます／＼微細の點に着眼して學問の仕方を解剖して行くことにするが、所詮、その落着する所は必ずしも獨學非獨學の一にあらずして、寧ろ依然として「學問の仕方」の全體に外ならざるべきことを、篤と御了解相願はねばならぬが、それに先立ち、こゝに猶ほ聊かの辯を必要とするものが残つてゐると申すは外でもなく、謂はゆる獨學自身が又や、審かに之を吟味し來ると、たゞに一種類のものとして見るのみでは未だ多少の不足を感ぜざる能はずといふこと、即ち是れである。よつて其の小別を掲ぐると共に、一

一に就き獨學の概念(概念の意義、後に出づ)を明確ならしめて置くこと仕よう。

第二節 普通に謂はゆる獨學と誠の獨學

△普通に所謂獨學は眞個の獨學なりや其の一部分なりや▽ 按ずるに獨學とは讀んで字の如く學問を獨習することだが、しかも世間普通に謂ふ所の獨學は必ずしも其の通りに學問の獨習といふこと悉皆を指してゐるものとは考へられない。單に學問の獨習ならば、普通の學生がする自修も、學者のする専門的研究も、乃至は又、一般の紳士淑女が朝夕に行ひつゝある「我家に於てする學問」即ち讀書などを其の日課と同様にしてゐる例の如きも、みな一様に大同小異の獨學なりと謂ふが至當であるにも拘らず、普通の獨學は、さまで廣い意味のものとは受取り兼ねるのである。借問す、あれが眞個の獨學

か、これが眞個の獨學か——獨學の眞義、果して何處に存するものとか爲す抑々また獨學なる言葉には、本來、一定不動の語義といふものが無い譯なのだらうか。知らず、獨學の概念如何？

さりながら唯だ一口に學問の獨習と云へば、何人が常識上より之を判斷しても矢張り「師に就かざることを、即ち其の教授を受けざることを」と、かう解するのが至極尤もの話ではないだらうか。もし獨學の眞義こゝに存すとせば、事實それが如何程廣い意味のものになつて來たからとて、敢て驚くには及ぶまい。蓋し一般から言ふと、人は他人の教授を受けて學問を修めてゐる間よりも、寧ろ其の傍を去つて——若しくは丸切り師などいふ者に就かずして之を獨習しつゝある時の方が、恐らく長久の期限に互る位なものだらうと思ふ。されば學問の仕方としても、かの被教授法以外に、なほ種々の變つた方法さへ擧げ得られるといふ譯ではなからうか。それは兎も角、吾人は學術

の教授を受くるの以外に於て、一般の人が之を獨習するといふ諸多の場合を想像して見ることが出来る。が、その有らん限りの場合たるや、斷じて世に謂ふ獨學の場合のみを以て盡きたりとはしない。こゝに於てか知る、普通の獨學は、未だ眞個の獨學から之を見ると一部分に過ぎない——決して其の全體を指してゐるのではないと謂ふことが出来る。

△無條件の獨學と條件付きの獨學▽畢竟するに學問の獨習は、たゞ單に學問の獨習たるを要す。換言すれば、眞個の獨學は無條件の獨學でなければならぬ。所謂「條件付き」の獨學（或種の獨學、此種の獨學など云ふが如し）となつては、もはや獨學の全體に非ずして、その一部分と見るべきである。譬へば人間は人間の全體である。併し男である女であるでは、どちらも未だ眞個の人間を言ひ盡したことになる。これ蓋し男性とか女性とか其の性を限つて言へば、既に人間が條件付きとなつた譯で、従つて男も女も人

間の一部分だといふことになるが故である。もつとも之と同時に又、その性といふ一條件を區別の標準點として、人間の種類を分つて男女の二とすといひ得ることにもなつて来る。すべて分類の理は此の如きものだ。餘事は扱措き、獨學の場合とても其の理に異なつた所はない。即ち條件付きの獨學となれば、眞個の獨學の中にあつて種類を分つものとなりこそすれ、それが其の儘、直ちに眞個の獨學と同一視さるべき譯はないのである。

△一旦就學した人の獨學と未だ會つて就學しなかつた人の獨學▽ ところが、普通に所謂獨學は、寧ろ残りなく條件付きの方であると見ても不可はなからう。多くの場合に於て「獨學者」と稱するのは、つまり學校の生徒などに對しての話に過ぎないので、その獨學者のする獨學は無論獨學に相違ないが、しかも學校の生徒などが在學中に師の傍を離れてする自修は勿論、その學校を卒業して後、一廉の學者なり紳士となつての上でする自修などに至つ

ては、世人これを獨學と呼ぶこと稀れである。併し一旦就學した人の獨學も未だ會つて就學しなかつた人の獨學も、その獨學たるや即ち一である。たゞ、「就學した人の」とか「就學しなかつた人の」とか云へば、それだけ獨學の意味が限られて来る——いづれも條件付きとなつて来るので、獨學全體の中にあつて彼と此と種類を分つとは謂ひ得られるけれども、斷じて此は獨學、彼は獨學ならずとの區別は生じて來ない。何となれば、それは男女その性を異にせるの故を以て「男は人間なり。然れども女は人間に非ず」と謂ふのが不法なると、その軌を一にしてゐるからだ。之を要するに、普通の獨學以外に獨學なしとするのは聊か早計たるを失はない。

△何れにするも純個の獨學は稀れにして折衷が寧ろ大部分▽ 眞個の獨學か非獨學かを區別するには、何も其の人を見るには及ばない。その人は誰れであらうとも、唯だ學問獨習の事實さへあれば、それが即ち獨學だ。現在獨

學してゐるといふ事實が正に存するのみを以て足るので、過去や將來の事が其の獨學を肯定したり否定したりする理由に供せられるものではない。未だ曾て就學したことがない人の獨學も、一旦就學したことがある人の獨學も、等しく是れ獨學は獨學である。たゞ其の人に重きを置き、過去と現在とを結び着けて考へる段になると、その過去に於て——或ひは現在に於て獨學と同じに——した就學不就學の事實を唯一の條件として、一は非獨學と獨學との折衷である、一は純個たる獨學、即ち終始一貫したる獨學であると、斯く二種類に分つことが出來得るに過ぎない。嚴格に言へば、過去現在及び將來を通じて一貫した獨學——此上なく純個たる獨學こそ、全然條件なしの獨學と云ふもので、ひとり之のみが誠の獨學であるに反し、かの少しでも獨學非獨學の折衷となつてゐるものは、悉く非獨學の方と見て仕舞へる道理かも知れぬが、併し斯程までに純個を極めた獨學は、事實今日の世に多く其の類を發

見し得ないのである。謂はゆる獨學者中の無學者も、今日は全くの文盲漢であるよりも、嘗て一度は小學校か何かへ入學して、少なくとも「いろは」位の教授は受けたといふ方が寧ろ其の全體に近いのではなからうかと思ふ。して見れば世の中には其の實、純個たる獨學者といふものは甚だ稀れで、反つて獨學非獨學の折衷を行つてゐる者が大部分と看做さなければならぬ。そこで、學校の生徒又は其の卒業者がする自修は獨學非獨學の折衷だとの理由を以て、之を獨學以外と見る日になれば、一般の獨學者もまた非獨學者の側とするの外なく、終には眞個の獨學が零になつて仕舞はなければならぬ。畢竟、どちらも同じ條件附きの獨學なのであるから、その一方を獨學と見、片方を非獨學とするは誤つてゐる。即ち普通の獨學ばかりが獨學で、他の獨學が非獨學であるといふ如くに看做す世人の考へは大間違ひと知るべしである

△寧ろ通學主義の學問、獨學主義の學問と稱すべし▽ 勿論、同じく獨學

非獨學の折衷といふ中にも、その獨學を主としてゐるのと非獨學を主としてゐるのとの區別は認め得るので、殊に折衷が時を異にして行はれず、同時に行はれる場合は、一は獨學主義なり、一は通學主義なりと、判然見分けが付く次第である。けれども、之がために其の双方に共通して存在してゐる自修即ち獨學の事實を取消す譯には行かない。又その一方のみの自修を非獨學なりとすることも出来ない。だから、通學主義と獨學主義とは、共に學問の仕方として之を見れば、唯だ單に通學法である獨學法であると言切るよりも、寧ろ其の儘、通學主義の學問なり獨學主義の學問なりと謂つて置く位が、まづ大過なくして且つ適切の方であらうと思ふのである。——更に約めて之を言へば、普通の獨學は即ち「獨學主義の學問」に外ならない。併しながら獨學主義の學問は、必ずしも純個の獨學より成立つには限らない。同時に「通學主義の學問」もまた其の一部に獨學を含み得る。眞個の獨學は恰も化學上に

に謂はゆる元素の如く、事實としては獨學非獨學の化合物——一は獨學主義一は通學主義——の中に見出されることが多いと云つたやうな譯合であらう

第三節 極端なる獨學、否、最も極端なる獨學

獨學主義と通學主義とは、あだかも一種の「化合物」の如く、さうして眞個の獨學は其の双方に共通して存在する「元素」に似たりと、斯う言つたが實は千人萬人の場合に於て、いつも「斯うだと言ふのではない。未だ今日に於ても、抑々『いろは』の『い』から始め、ズット其の先きまで押通して獨學一點張りといふのを實行する人が、必ずしも皆無だとは謂ひ得なからうこれ即ち純個たる獨學である。極端なる獨學主義者と云ふものである。しかも極端なる獨學は之に終らない。獨學一點張りも、獨學非獨學の折衷も、その獨學のみの意義——獨學法のみの成立ちに變つた所はないが、最も

極端なる獨學は、その意義、その方法の成立ちを切詰める。それは何うするかと云ふに、學問の獨習を「師に就かずして——教授を受けずして」だけに止めて置かない。即ち教師は愚か、一切他力を借らぬ獨學である。獨學の法には「讀書」もあり、「會話」もあり、其他いろ／＼だが、何れにしても一切他力を借らぬものと云ふは甚だ少ない。だが、最も極端なる獨學は全く自分一人主義で、中間に何物をも存在させず、直ちに研究の目的たる宇宙間の事物に打當つて研究するといふ方法で、これは一面から言ふと簡易な學問の仕方であると共に、他の一面から言ふと六ヶ敷い學問の仕方なのである。ところで、獨學一點張りでは今日の學問が容易に仕切れぬといふ點は嘗て申したが、こゝに謂ふ最も極端なる獨學も、また其の點は相似てゐる。が、これは獨學一點張りの場合にも行はれ、獨學非獨學の折衷の場合にも行はれる。殊に獨學一點張りで、その上に其れが最も極端なる獨學であるといふことになると、イヤモ—無類飛切りと云つたもの！

第四節 その病毒を以て學問を滅失する勿れ

△或ひは世間に雷同し、或ひは學問を二の次ぎに考ふるの弊▽ 以上は獨學の概念及び種類一通りを述べたに止まるので、その方法の分析は後に譲り、終りに臨んで一ツ、これは思ひ付いた儘、一般の獨學者に向つて注意を呈して置きたいと思ふ事柄に外ならない。といふのは、世間普通に學問の仕方さへ云へば、誰れしも通學が第一、獨學は第二と考へる。勿論、理想通りに行けば通學も獨學も其の效果に於て大差なく、且つ或る場合には寧ろ獨學に若かない位であるが、併し一般的に言へば通學が第一、獨學が第二たる地位は矢張り動かすことが出来ない。それは既に分つてゐる。けれども此所に憂ふべき事は、世間の人を知るも知らぬも押並べて通學第一、獨學第二と

見る方へ附加雷同するに過ぎないかのやうに思はるゝの點である。さうして又、今日普通に人が其の第一たる通學法を採らずして、第二の獨學法を選ぶことになるのは、純然たる學問上の事としてよりも、寧ろ實際問題——殊に社會事情や一身上の關係などがヨリ多く考へられての結果であらうと想像されるが、これも吾人が大いに感服するを得ざる所なのである。が、その選擇は既に決定済の問題であつたり、現に採りつゝある方法が中途で變へられぬ仕儀となつてゐたりするのでは、無論、今更騒いで見ても致し方がないやうだけれども、さて其所が「學問の仕方は不斷に選擇すべし」で、將來の事もある譯だから、出來得る限り慎重な考究を加ふるの要があらうと思ふのである。

△かるがゆゑに獨學者は俗氣紛々とし學生然たる所なし▽ 實際問題としても然うだ。従來は、當り前なら學校へ上るのだが、事情が許さぬから通學

は斷念して、その代りに獨學でもして見ては、といふ氣を起した——どうせ通學のやうに完全な譯に行くまいが、マア試した——それでも丸切り學問せぬよりは増したらう——と、斯う云ふ調子の、ボンヤリした頭腦で以て獨學を始める人が過半であつたらしい。もつとも中には「嗜好」に因るか「必要」に基くかして、學問に對して非常な熱心を有し、加ふるに金鐵の如き堅固な意氣を以てして、最初は同じやうに漠然たる考へであつたかも知れないのが最後には兎も角も「成功」とまで漕付ける人も間々見受けられる。が、さうして成功した人にもせよ、果して最善な學問の仕方をしたのであつたか否かは疑問として残るのである。まして然らざる人をやで、第一、完全に學問が出来るものやら何うやら、も少し確個とした根據から見極めを付けて後、その獨學なら獨學に着手して欲しい。それは固より純然たる學問上の問題には止まつてゐないのだ。既に事情が許さぬと決してゐれば、まづ獨學の外は

ないやうなものだが、それにしても唯だ事情に負けたと云ふばかりでなく、更に積極的に相當の理由あつて通學よりも獨學を可なりと認めたといふ底の自信が欲しいと思ふ。その理由たるや即ち學問上からと實際上からと——純然たる學術研究法の上からと人事世事の關係上からと——の双方から出て來なければいけない。その何れから見ても、ナニ獨學でも通學の壘を廢するこゝが出來得ざるに非ず、且つ獨學の方が寧ろ得策であること、充分に主張が出來るやうでなければ物足らない。從來の如くに實際問題のみに拘束され、従つて之に重きを置き過ぎるやうでは、獨學者は教育に囚はれる恐れがない代りに、何時も——學問以外の世間に捕慮となつてゐるばかりで、かの「學問の獨立」などを望み得るどころか、今迄のやうに俗氣紛々として、少しも學生然たる所がないと見られても仕方がなからう。

△百の害毒この大病根より發生し來らん▽ 右は單に通學法と獨學法との

選擇問題に關してのみ言ふのではない。學問の仕方全體に就いても、また然りである。通學生の教育病と獨學者の事情病とは正に好一對である。願はくは一にも事情、二にも事情で、最後の果てに肝腎の學問そのものを無くなして仕舞はぬやうに御注意ありたい。蓋し百の害毒、この一大病根より發生し來らんことを恐るゝが故である。——先づは右一應の注意までとして置くが待て暫し！ 讀者或ひは本章に並説した「獨學の概念」と「獨學者の一大病根」との間に如何の關係があるのだと疑はるゝかも知れない。吾人は之に答へて曰はんとす「たゞ能く汝自身の地位を解せよ。而して後に其の不相應なる疾患を一掃し去るべし」と。

第十一章 主として讀書に依る獨學法

第一節 學術研究の機關、就中、獨學の機關

△普通の學校生徒は其の學校を主たる研究機關とす▽ いはゆる學術研究の機關は一二に止まらぬが、各人の採用すべき主たる機關は、凡そ一種と見ることが出来る。但し研究の目的たる實際の事物それ自身は、こゝに之を研究機關と看做すべきではない。先づ獨學者に非ざる普通の學校生徒が主たる研究機關としてゐるのは何かといへば、則ち其の學校といふものに外ならぬのである。勿論、彼等によつて採用される研究機關は、普通の學校以外にも、なほ其の種類少なしとしない。否、ありと有らゆる研究機關は、彼等もまた之を利用し得べき筈であるのみならず、この事にかけては一般に獨學者よりも寧ろ彼等の方が、ヨリ大なる自由を享有してゐるものと謂つて可から

う。それといふのも畢竟、普通の學生と獨學者とは、その學問に従事するの立場が必ずしも同じくないからで、それだけ又、獨學者は普通の學生以上に研究機關の選擇や、研究の方法などに、就き特別に注意を拂ふの必要が生じて來るといふ道理なのである。

△其他採用し得べき従たる研究機關の例▽ 餘事は扱措き、學校以外に於て、生徒の採用し得べき研究機關の例を擧げて見れば、第一には普通の書籍殊に學校に於て使用しつゝある教科書以外の參考書の如き、是れである。時としては、普通の書籍ばかりでなく、獨學者の専用品とも稱すべき講義録までも、學校の生徒は之を參考書として用ひてゐることがある。まづ早い話が圖書の類は何でも研究機關になると思つて宜しからう。従つて圖書館の如きも、また一種の研究機關と見るべきである。それから、學校の教師以外に雇用される家庭教師といふものなども、やはり別個の獨立した研究機關として

考へ得られる。其他まだ澤山あらうが、要するに學校を以て「主たる研究機關」としてゐる生徒の目から見ると、學校以外のものは何れも「從たる研究機關」であるを謂へよう。約言すれば、普通の學校生徒が主たる研究機關としてゐるのは、即ち其の學校といふ一種があるに過ぎないのである。

△獨學の機關としては一定したるものなし▽ 然らば獨學者の場合如何？ 申すまでもなく、獨學者も相當の研究機關を借りて用ふるに非ざればもはや今日は完全に學問をなし得べき見込がない。普通の學校教育を受ける代りの獨學とあれば、尙更さうである。それは明々白々だが、こゝに唯だ問題となるのは、即ち研究機關の種類である。獨學者の場合は、學校生徒の場合のやうに、曰く學校とばかり、簡單に一言で以て之を濟ませるといふ譯には行かない。何となれば、獨學者の採用すべき研究機關としては、必ずしも一定したものが無いからである。一體、研究機關の主たるものとか、從たる

ものとか云ふのからして、既に比較的話で、その間に判然たる境界がある譯ではない。が、凡そ物には中心が無ければならぬ。兎も角も中心となる研究機關、それが主たる研究機關であるといふ位に解して置くより外はない。學校の生徒は、その學校を中心としてゐるのである。ところが、獨學者も時としては學校に通ひ出すことがあるかも知れない。さうすると、普通の學校生徒に早變りしたやうなものである。もし其の學校生徒たるの時に於て學問の大部分が爲されたものとすれば、言ふまでもなく學校が中心となつた譯で差引勘定に於て、その人は寧ろ獨學者でなかつたと云ふことにならう。だから、普通の學校は、主たる獨學機關となるといふことは有り得ないのである。たゞ併し普通の學校も、また從たる獨學機關には成り得るものと思つてゐなければならぬ。

△主たる獨學機關は普通の書籍か講義録か▽ 按ずるに、主たる獨學機關

とすべきものは、凡そ二種あるやうである。もつとも其の二種は、双方同時に主たる機關となると云ふのではなく、主たる機關としては、矢張、どちらか一種が選擇されることになる。たとへば双方併用されたとしても、上述の如く、主と云ひ従と云ふは比較的話なのであるから、必ず一方が主たる機關、さうして他方が従たる機關であるといふやうに、その場合次第で主従の區別を付けて見得らるべき筈である。ところで、その二種とは何々かといふに、一は普通の書籍である。前に學校の生徒は従たる研究機關の一種として圖書の類一切を用ふると言つたが、こゝにいふ書籍も随分その意味は廣いのである。それから又、一は講義録であると言つてもよし、言葉を換へて「通信教授機關」もしくは「通信學校」であると言つても不可はない。講義録も一種の書籍に相違ないが、こゝでは聊か特別のものと看做したもので、之と區別するために、他の圖書類をば「普通の書籍」と稱した譯である。同様に

通信教授機關もしくは通信學校は、普通の學校其他類似の教育機關と區別されなければならぬ。さは云へ、講義録といふものは、通信教授機關もしくは通信學校によりて發行せられる一種の書籍に外ならぬのであるから、講義録と、通信教授機關もしくは通信學校とは、二つ結び着いて一つの獨學機關となるものと見るのが至當である。

△主として讀書に依る獨學とは即ち是れ▽ 就中、普通の書籍を以て主たる獨學機關とする方法は、ズット昔から行はれてゐるものである。書籍を閲讀して、之に依り、獨學の全部又は大部分を爲し遂げる。主として讀書に依る獨學法とは、即ち此の謂ひである。かの「實物研究」の如きが一部に行はれてゐたのを除いては、往時の獨學は、殆ど讀書ばかりのものであつたと謂つてもよい位だらう。どちらにしても其れは比較的に簡單なものであつた。ところが、此節では獨學者の専用品として作られた講義録といふものがあ

る。獨學者のために、通信教授機關もしくは通信學校と云つたやうな、特別の教育機關が勃興して來た。これぞ最新の獨學機關である。而して普通の書籍を以て主たる獨學機關とする方法に比すれば、講義録を以てするものは、やゝ進歩した所があるだけ、それだけ獨學法が複雑なものであるやうに見える。それは兎に角、今日なほ普通の書籍一方で獨學をやつてゐる人が澤山ありさうだ。普通の書籍が可か講義録が可か、これは大いに考へ物だと謂はねばならぬ。どちらを主たる獨學機關として採用しても、その獨學は過不及なく遣つて行けさうに思はれる。それだけ又、優劣の判断がむづかしくなる。が、何しろ中心たる研究機關の問題であるから、輕卒に解決を與へる譯には行かない。

△從たる獨學機關は寧ろ一般の研究機關▽ 若し夫れ從たる獨學機關に至つては、普通の學校を別としても、幾種でもあるが、しかも大抵は獨學機關

として、特別の性質を有するものでなく、寧ろ一般の研究機關として見るべきものであるから、こゝに取立て、言ふほどの事は無いと思ふ。否、それらは追々に述べる事とし、又、講義録の話も後廻しとして、先づ本章に於ては主たる獨學機關としての、普通の書籍に就いて、聊か之を採用するの利害得失などを研究して見ることにする。

第二節 獨學法としての讀書即ち書籍涉獵法

△一般の研究手段たる讀書と、獨學法としての讀書▽ 講義録も一種の書籍である以上は、單に之を閱讀するといふことは、矢張り讀書の領分に屬する事であるから、講義録を以て主たる獨學機關とする場合に於ても、讀書は一の重要な研究手段となる譯である。たゞに然るのみならず、普通の學校生徒も教科書か参考書かを使用せぬことは稀れであるから、讀書が重要な

研究手段の一となる點は、さして變りがない。それ故、讀書もまた一般の研究手段たる性質を有してゐるのは、固よりの事なのである。が、こゝにいふ獨學法としての讀書は、勿論、その一般のものと同様と混同されてはならぬ。蓋し普通の書籍が主たる獨學機關として採用された場合は、獨學が殆ど讀書ばかりのものとなるのである。講義録の背後には、通信教授機關もしくは通信學校といふものが附いてゐるから、獨學が必ずしも讀書ばかりでないことになる。更に又、普通の學校生徒となつては、その學校の側が完全なる教育機關としての働きを爲すのであるから、おのづから生徒の研究手段は、大いに讀書以外に出ることになるのである。約めて言ふと、どの場合に於ても、讀書は重要な研究手段となるものであるが、たゞ其の程度が幾分づゝ異なつて來るといふに過ぎない。さうして、普通の書籍を主たる獨學機關とした場合は、讀書が重要な研究手段となること第一なのである。

△書籍涉獵法——一種の間接的研究法▽ 獨學法としての讀書を、一般の讀書法と區別するために、著者は別に「書籍涉獵法」といふ名稱を之に與へる。蓋し普通の書籍を以て主たる獨學機關とする方法は、つまり書籍の涉獵といふことに外ならない。今、之を説明して見ると、そも／＼書籍の涉獵とは幾多の書籍を購讀して、その中より研究の目的たる事物の知識を涉獵し來るの義である。「涉」とは川を渉るが如く、「獵」とは獸を獵るが如し。即ち書籍の涉獵といへば、要するに「群書を歴覽する」の意味に過ぎないのである。群書を歴覽して、その中から目的たる智識を尋ね出さうとするのは、やはり一種の間接的研究法（直接的研究法即ち實物研究の對、後に説明すべし）たること勿論だが、今日の學問に對して、一に之のみを以てすると云ふは、随分迂遠な方法と稱せざるを得ない。試みに此の方法の一長一短を述べて聊か讀書家の參考に供するとせん。

△多讀、漁讀、漫讀、散讀、亂讀▽ 右に申す如く、書籍の涉獵とは群書を歴覽するの意であるから、いはゆる書籍涉獵法は、多く書を読むといふ點から云へば、即ち「多讀法」である。併しながら、それは通例事實に於て多讀法となるといふだけで、必ずしも讀書の分量の多寡が、以て書籍涉獵法たるを否を區別するの標準となるものではない。例へば、英語を研究の目的とする者が「英語自修法」といふ、タッタ一冊の書物を購讀したばかりでよく其の目的を達したと假定すれば、これは決して多讀法ではないけれどもやはり書籍涉獵法たるを失はない。たゞ此の場合は、書籍の涉獵を始むると同時に僥倖にも（然り、滅多に此んな事は望まれない）一冊で以て目的を達し得るやうな良書に出つ食はしたばかりに、其餘の涉獵といふ仕事を省略することが出来たまでの話であらう。斯かる稀有の例外を除けば、涉獵法は勢ひ多讀法とならねばならぬ譯合ひである。

又、書籍涉獵法は、簡單にいへば「漁讀法」である。その特徴は、一部もしくは一種以上の書籍を「漁り読み」するにある。たゞ漫然と多くの書籍を「散らし読み」するにある。故に、或ひは之を「漫讀法」、「散讀法」と稱してもよい。斯かる讀書法の通弊としては、往々その結果が、「亂讀法」となることあるを免れない。亂讀法となつては、讀書の功能もまた知れたもので、此の如き書籍涉獵法ならんには、てんで獨學法だとか學術研究法だとかいふものとして、よく成立つ筈がないのである。獨學法たるべき漁讀法は、もとより多讀精讀でなければなるまい。

△斷片的知識だとか貧弱なる學術的知識だとかは寧ろ得易し▽ もしも研究者の目的とする所が、ごく／＼簡單な物事に就いての知識を得んとするに在つて、前に掲げた例と同様に、タカゞ世間に在り觸れた書籍の一冊か二冊かを、手當りばつたりに買つて讀んで見たといふ位で、それで志望が遂げら

れて不足が残りぬとしたならば、その研究たるや言ふに足らず、知識たるや論ずるの價値なきものと看做してよい。かくの如き知識は、即ち断片的知識であつて、一の完全した學術的知識もしくは真個の學術なるものではない。高く踏んでも、一小學術の淺薄にして且つ朦朧たる知識より以上に出ず、要するに内容の貧弱なるは、又これ當然の事であらう。それも、或る程度の教育を既に了へた者などが、單に知識の補充又は代入（舊知識に對して新知識の）を目的として書を読むの場合ならば、断片的知識また必ずしも不可ならずである。何となれば、彼等は其の本體たり基礎たる知識を有してゐるのでつまり土臺があつて、その上に一部の塗りを施し、又は破損の個所に修繕を加へんとする者に過ぎぬからである。けれども、その土臺を缺いてゐる初學者の如き（必ずしも一般の初學者に限らず、或る専門の學術に對して初步なる人の如きも、また然り）にとつては、知識の断片的なるもの、或ひは學

術的知識の貧弱なるものなど、それ果して何爲るものぞ。たゞに知識の實際的及び精神的價値が乏しきの故に、右は得た甲斐がないのみならず、かへつて己れに害をなすことさへある。俗に「生兵法は大傷の基」といふのは、蓋し此所より發生して來る。

第三節 學校生徒の讀書と獨學者の讀書

△學校生徒の其れもまた一種の漁讀法、多讀法▽總じて書籍涉獵法に依るものは、完全なる學術的知識を得るといふ上に於て、他の研究法に比し最も多くの困難を忍ばねばならない。人によつては、その困難中の幾部分は到底こらへることの出來ぬものであらうとさへ思はれるのである。これは實に「學校に於てする研究法」を距ること遠き一大理由である。今、假りに學校生徒の學術研究法——例の通學法又は廣義の被教授法——を、單純なる讀

他の一面に於ては「專讀法」たる譯である。漁讀法であるとしても、斷じて謂はゆる「雜讀法」(即ち漫讀法、また亂讀法)ではない。

△獨學者の其れは容易に學術の完成を期し得べからず▽ 學校研究法の大特徴は右に述べた如く、書籍全體——いはゞ「書籍の集團」が、それ自身に於て、知識として一科の學術を完全に構成してゐるといふ點にある。即ち學術の完成が己づから期し得られるやうに用意の出來てゐるのが、學校の學校たる所以である。然るに、之に反して、大方は無規律を以て爲さるゝ獨學者の漁讀法に至つては、また概して多讀法兼雜讀法たらざるを得ないので、従つて之により、學術の完成を期する如きは、中々に容易ならざる事業なりと謂ふべしである。世の獨學者にして初志を貫徹する能はず、中途に白旗を掲ぐるの陋態を現はすものが必ずしも少なくないといふ原因は、畢竟この容易からざるを敢て爲さんとしながら、その之を爲すべき方法の如何を顧みぬ

故であるのが、正しく過半を占めてゐるのではなからうか。

△學校にあつては書籍よりは教師が主たる働きを爲す▽ しかも學校に於てするものには、たとへ生徒に「自動的研究法」が皆無なりとしても(例へば、初めて就學した小學兒童の如きは、寧ろ其の皆無なるものに近い)、それに反比して「他動的研究法」たる教授法といふものが學校の側にあるので、ために其の不足が出來得る限り補はれるといふやうな一大便利さへある。そも、學校にあつて生徒に知識を注入するものは、主として教科書——即ち書籍自身であるといふよりも、寧ろ教師その人である。教科書は、要するに教授用の道具たるに止まり、教授を手輕にするものとして役立ちこそすれ、決して教師の代理者として、自ら教授の作用を營むものでないことは阪々するまでもない。學校に於ては、書籍は借物である。教科書は無くても、教師にあらば、教授は行はるべきものである——現に高等専門の學校の如きに

あつては、餘り教科書といふものを使用しないで、單に教師の口述によつて教授の行はれてゐる學術が殊に多い。さうして學校の教師は、斯く直接に、自身にて生徒に知識を供給するの人たるのみならず、同時に又、生徒の指導者たり且つ監督者たるの任にも當るので、學術に添へて其の研究法を講ずるは勿論、更に生徒の邪路に入らんとする者があれば、これを抑へて、正道へ正道と歩行を運ばせるやうに努力する。こゝに於てか、一般の學校生徒は、生徒その人に缺點の無き限り、おのづから最善なる研究法——勞少なくして効多き研究法を採用してゐるやうな譯になる。斯くても猶ほ學校研究法に遺憾の多いといふ道理は有り得ないのである。無規律にして且つ何等の用意もなき書籍の涉獵法が、學校研究法を距る遠きものたるは、敢て異とするに足る事でない。

△學校の教科書それ自身は寧ろ獨學用に適せず▽ 學校生徒の使用してゐ

る教科書、参考書の類は、全體として統一を有し、それ自身、完全なる學術的知識を構成してゐるものとすれば、世の獨學者が、それを其儘そつくり採用して、己れの讀むべき「書籍の集團」に充て、之を以て無規律の雜讀法に代へる事としたならば、研究の效果——少なくとも單に讀書としての効果は或ひは大差がなからうと言ふ人があるかも知れない。が、そのやうに考へるのも、未だ教科書、参考書なるもの、性質を善く辨へぬからの臆斷であらう。前に言ふ如く、教科書は獨立して教師の代理者たり得るものでなく、學校あり教師あつての學科書である。これを土臺として、その上に各受持教師が嚙んで含めるやうな説明註釋を附し、同時に生徒を指導監督して、學術の研究を遺憾なからしめてゐればこそ、初めて教授の作用といふものが、全きを得るので、學校を離れ、教師を離れた赤裸々の教科書は、譬へば肉を剝取つた骨のやうなものである。多くの教科書は、元から教科書として著述編纂

されてあるのだから、骨以上の價値は無いのが寧ろ當然である。これを獨學に適する書籍たらしむるには、モット其の説明が懇切丁寧でなければならぬ。詳細なる註釋が加へられねばならぬ。さうして、全體が平易にして且つ趣味あるものとせられねばならぬ。教科書は、斯かる用意を缺いてゐるのが通例である。學校生徒が、普通の書籍中より選擇し來る參考書とても、また大同小異で、特に獨學用として編纂されたものに非ざる限りは、一般の獨學者、殊に初學者の讀むべきものとして不適當であるは言ふまでもなからう。

第四節 書籍涉獵法の計畫及び其の實行難

△自らする教育のシステムと書籍の搜出法▽ 既に學校生徒の教科書、參考書の類が、其儘採用して獨學用の書籍とするに足らぬとすれば、廣く世上に之を求むるより外はない。然るに、廣く世上に求むるといふことは中々の

難事である。まづ其の方法としては、或ひは然るべき學校の教授課程に準據し、或ひは別にセルフ、エデュケーション即ち「自らする教育」の計畫を立て、それに依つて多數の書籍を買ひ集め、さうして修得せんとする知識全體の統一を失はぬやうに注意を拂ひつゝ、研究を始め、あくまで之を遂行して終に「自らする教育」をして學校教育同様のものたらしむるが如きは、蓋し最上の策であらう。が、この上策も、今日の世の中に於ては種々と實行難が伴ふので致し方がない。假りに是れが「自らする教育」の制度として、殆ど間然する所の無いものとしても、さて其の求むる書籍が果して世上に悉く揃つてゐるか否か大疑問である。斯かる書籍の集團を搜し出すといふことは、今日の社會に於ては、或ひは不可能事であるかも知れない。例へば世上に在觸れた獨習書の類も、未だ完全なるものは少ない。辭書の類も同様、百科全書の類もまた同様である上に、これらは概ね初學者の自修用として適當なも

のではない。よし又、斯かる書籍の集團が世上に有り得るとしても、如何にして之を選択し、如何にして之を發見し、如何にして之を購讀すべきか、なごいふ諸々の難問が生じて来る。

△今日は書籍涉獵法の實行が大難事たるの理由▽ 蓋し今日世上に存在してゐる書籍は、いはゆる汗牛充棟も管ならずで、その種類その數の夥しいことは、殆ど言語に絶するばかりである、しかも其の多くは個々別々のもので相互の間には何等の關係も無い、約束も無い。それは、普通の書籍が元から或る種類もしくは程度の學術の獨習用書の集團として著述され、刊行されたものでないからであつて、その中から強ひて、全體として統一を有し、さうして一科の學術を組立つるに足るやうな、獨習用書の集團を求めて來るといふことは、寧ろ非望と謂うてもよい位なものである。故に書籍涉獵法は、獨習法として、今日は最も困難なものとなつた次第である。

前にも申した通り、かの實物研究といふ方法を除き、昔は書籍涉獵法以外に、殆ど獨習法と稱すべきものは無かつた。否、更に古くは、その以外に丸で學術研究法といふものが無かつたかのやうに考へられる。従つて往時に於ける書籍涉獵法と今日に於ける其れとは、大いに其の價値が異なつて來てゐる。第一、獨習の機關としての書籍の有難味が非常に違つてゐる。今日の人々は、世に書籍の多過ぎることを寧ろ苦としてゐるが、之に反して、往時に於ては書籍の餘りに少なきことが歎せられた。しかも他に頼まんとする物とては無ければかりに、昔の人は有らゆる困難を排してまでも、覺束なき書籍の涉獵法を行ひ續けて、兎にも角にも獨習の目的を達したものである。されば、昔の人にとつては不完全な書籍涉獵法が唯一の策であつた譯であるが、今日の人は何も好んで其の眞似をするには當らない。英國の文學者チガーレス、ラムといふ人の書籍觀に「こゝに書籍あり。こゝに書籍あり。然れども書籍

ならざる書籍あるを如何せん」と喝破した一言がある。それが即ち今日の事實で、書籍の多過ぎる弊は、終に學者をして此の聲を發せしむるに至つたのである。昔は其の正反對で「書籍なし。書籍なし。書籍ならざる書籍だに無し」とでも謂ふより外はなかつた。げにも過ぎたるは及ばざるが如し。購讀し度いにも「書籍ならざる書籍」が有り過ぎて、それで今日は書籍涉獵法が難事となつたといふ譯である。

第五節 書籍選擇上の注意及び其の良法

△研究の目的と書籍の内容との合致が第一に必要▽序でに、書籍の選擇といふことに關して、なほ一言を追加して置きたい。書籍の選擇は、まさに讀書法の第一着手たるべきもので、之を爲すの標準も亦、まづ研究の目的——學問當面の目的——より出て來なければならぬ。研究の目的にして明確

ならずんば、購讀すべき書籍の集團といふもの、範圍限界が矢張り明確を缺き、從つて其の選擇は當を失すべき筈だからである。故に、先づ目的を明確に定めて置いてからの事にしなければ、如何に深い注意を拂はうとも、書籍の選擇に過誤なきことを保し難い。研究の目的は、一面よりいへば獨學者其の目的即ち志望で、他の一面よりいへば其の對象たる事物の知識である。さうして此の兩側の目的は、精密に相一致するに非ざれば、それだけ研究の効果は乏しくなる譯である。從つて書籍選擇上の注意としては、第一に各人の志望と、書籍の内容たる知識とが同じきか否かを考ふるの必要がある。購讀すべき書籍は、いづれの點より見ても、研究者其人の目的に適合したものでなければならぬ。その不適合なるは、即ち不純物である、不良の書籍である。

△選擇の標準が根本に於て曖昧を來す所以▽かの普通の學校生徒の如く

寧ろ「他動的研究法」に傾くものにあつては、自身の目的は餘り明確な方ではなく、たゞ注込まれるがまゝに知識を受入れてゐるに過ぎぬやうなのが多数。殊には確個たる志望を立て、居らぬために、正則の教育を受けつゝあるにも拘らず、熱心なる獨學者に比して數等劣る位な成績を擧げる者さへ少なからぬ有様である。たゞ併し彼等には學校あり教師あるが故に、早く其の對象たる知識の何に屬するかを明瞭にし得るの利便を有してゐるのは、右の缺を補ふにも足る點なのである。之に反して、一般の獨學者は、恐らく自身の志望は確個たるものと看做し得られる。又、その故にこそ、百難を排して成功する者が多いのだと謂ふことも出来る。けれども、獨立獨行の聊か心細さは如何ともすべからずで、最初よりして研究の目的たる知識の成立すべき所以を明瞭にすることは、彼等にとつては不可能事であらねばならぬ。これが爲めに選擇の標準は根本に於て曖昧を來し、ツイ好い加減の判斷で、大凡の所を決定し、斯くして選擇したる書籍の購讀を急ぐといふことになり勝ちなので、往々にして玉石混淆の弊に陥り、ト、の詰まりは芳ばしからざる結果を招ぐに至るのである。

△書籍選擇の便法——殊に讀書機關の利用法▽ 勿論、研究の目的に對して、たゞ「概略」といふ位の程度に於いて適合した書籍を選択し、もしくは發見せんとするだけの事ならば、これは餘り困難な事ではないかも知れない例へば、新聞雜誌の廣告又は新刊紹介欄などに注意するのも其の一法である。直接書店に就いて問合はせ、或ひは更に其の發行及び取次圖書の目錄を取寄せて見るのも、その一法である。なほ又、近頃は普通の書店以外に新聞社、雜誌社などで代理部（但し其の名稱は一定してゐない）を附設して、諸商品の取次販賣を兼營してゐるものが少なくないから、さういふ所へ申込んで、氣に入つた書物を買入れるといふやうな便利な方法もある。のみならず

如^{じよ}上^{じやう}は寧^{ねい}ろ在^あり來^{きた}りの方^{ほう}法^{はふ}に過^すぎないの^{ので}、既^すに今^{こん}日^{にち}は社^{しゃ}會^{かい}一^い般^{ぱん}に讀^{どく}書^{しょ}の風^{ふう}が盛^{さか}んになつて來^きたし、前^{ぜん}述^{じゆつ}の如^{ごと}く書^{しょ}籍^{せき}の多^{おほ}過^すぎる餘^よ弊^{へい}さへ生^{しやう}じてゐる有^{あり}様^{さま}だしするので、特^{とく}別^{べつ}の讀^{どく}書^{しょ}機^き關^{かん}が必^{ひつ}要^{やう}となり、そのた^{ため}の定^{てい}期^き刊^{かん}行^{かう}物^{ぶつ}であるとか、何^{なに}々^{々な}の會^{かい}だとかいふやうなものまで現^あれて、それ^{ごと}く讀^{どく}書^{しょ}家^かに多^た大^{だい}の満^{まん}足^{ぞく}を與^{あた}へつゝあるのが正^{まさ}に事^じ實^{じつ}である。此^{この}種^{しゆ}のものも、亦^{また}これ一^い種^{しゆ}の獨^{どく}學^{がく}機^き關^{かん}と見^みれば見^みられるので、大^{おほ}いに人^{じん}意^いを強^{つよ}うするに足^たる譯^{わけ}だが、たゞ今^{こん}日^{にち}に於^おては未^{いま}だ其^{その}發^{はつ}達^{たつ}の充^{じゆ}分^{ぶん}ならざる所^{ところ}あるを遺^{ひか}憾^{かん}とせねばならぬ。いづれにしても今^{こん}日^{にち}の場^{ばう}合^{あひ}、僅^{きん}少^{せう}の費^ひ用^{よう}なり手^て數^{すう}なりを掛^かければ、幾^{いく}分^{ぶん}なりと目^{もく}的^{てき}に接^{せつ}近^{きん}した書^{しょ}籍^{せき}を發^{はつ}見^{けん}することは、まづ比^ひ較^{かく}的^{てき}容^{よう}易^いに出來^{でき}得^えるものと心得^{こころえ}て宜^{よろ}しからう。

△更^{さら}に一^い策^{さく}は最^{さい}初^{しゆ}の數^{すう}冊^{さつ}を犠^ぎ牲^{せい}に供^{こう}して讀^{どく}書^{しょ}の端^{たん}緒^{しゆ}とすること▽ もとよ^り精^{せい}密^{みつ}に目^{もく}的^{てき}に適^{てき}合^あしたものでなければ良^{りやう}書^{しよ}とはいはれぬ筈^{はず}だけれども、最^{さい}

初^{しゆ}から之^{これ}を得^えんと欲^{ほつ}しても、その選^{せん}擇^{たく}が容^{よう}易^いでないから、寧^{ねい}ろ僥^{けい}倖^{じやう}の外^{ほか}は望^{のぞ}み難^{がた}い事^{こと}と思^{おも}はねばならぬ。そこで、一^い策^{さく}としては、最^{さい}初^{しゆ}の一^い二^に冊^{さつ}は其^{その}幾^{いく}分^{ぶん}でも目^{もく}的^{てき}に適^{てき}合^あしたものを以^{もつ}て忍^{しの}ぶことにする。悪^{わる}くすると、一^い二^に冊^{さつ}が數^{すう}冊^{さつ}に上^{のぼ}らぬとも限^{かぎ}らないが、兎^うも角^{かく}も其^{その}れだけ「讀^{どく}書^{しょ}の端^{たん}緒^{しゆ}」と看^み做^なし、或^ある程^{てい}度^どまでは犠^ぎ牲^{せい}に供^{こう}して、その代^かりに、少^{すく}なくとも研^{けん}究^{きゆう}の手^て引^ひ即^{すなは}ち Introduction たるべき知^ち識^{しき}を得^えるか、乃^な至^{いた}は研^{けん}究^{きゆう}の方^{ほう}法^{はふ}一^い斑^{はん}の暗^{あん}示^し (Hint) を與^{あた}へられるかすれば足^たるといふ位^{ぐん}な、頗^{すこ}る沈^{ちん}着^{ちやく}した考^{かん}へと非^ひ凡^{はん}なる雅^が量^{りやう}とを以^{もつ}て之^{これ}に臨^{りん}み、而^{しか}して爾^に後^ご、更^{さら}に悠^い々^いと研^{けん}究^{きゆう}の步^ふを進^{すす}め、敢^あて怠^{おこ}ることなくして、いはゆる大^{たい}器^き晚^{ばん}成^{せい}を期^きする底^{てい}の、氣^き長^{なが}な方^{ほう}法^{はふ}で以^{もつ}て遣^やつて行^ゆかれるものならば、如^い何^かなる書^{しょ}籍^{せき}涉^{せつ}獵^{りやく}法^{はふ}も、獨^{どく}學^{がく}者^{しゃ}の前^{まへ}にあつて難^{なん}事^じたるものでないといふのである。併^{しか}しながら出^で來^き得^える限^{かぎ}り速^{そく}成^{せい}的^{てき}、實^{じつ}用^{よう}的^{てき}ならんことを欲^{ほつ}する多^{おほ}くの人の採^{さい}用^{よう}すべき獨^{どく}學^{がく}方^{ほう}法^{はふ}としては、さういふ氣^き長^{なが}な方^{ほう}法^{はふ}は寧^{ねい}ろ

避けざるを得ないものであらう。

第六節 書籍購讀の經濟と本領に入つて

よりの事

△書籍の購求と經濟不經濟の眞理▽ 假りに良書の選擇發見が然まで困難な事でないとしても、之を購求するといふ段になれば、言ふまでもなく「代價」を拂はねばならぬ。然るに善良なる商品は、それに比例して價格の不廉なるを原則としてゐる。書籍も亦これ一種の商品に外ならぬから、良書といへば大抵その値段は高いものときまつてゐる。例へば、僅か一部で其の代價が二十圓もする某書店發行の大辭典だとか、モット高いのでは何百圓といふ「大英百科全書」の如き、是等は聊か法外なものぞ看做しても、其他並々の書籍中に、なかく安からぬものが多いのである。よしや其の一冊づゝは僅少

の價で買ひ得らるとしても、何冊も之を買つて、讀まんとする書籍の集團たらしめるといふことになる、その残らすの代價を合計した金額は可成りに大なるものとならう。勿論、これは要するに金錢問題に歸着するのであるから、各自の財囊が許す以上は如何なる高價も不可でないと言ふ人もありさうだが、それは思はざるの甚しきもので、試みに聊か經濟學上の眞理を此所に當嵌めて申さうなら、その購求した書籍にして其れだけの役に立たぬものだとすれば、たゞ「價格」(prices)が高いのみで、その割合に「價値」(value)は無のいだから、これ即ち不經濟の極といふもので、全然實益を無視し、且つ又、學術研究法の理想に背馳した沙汰であると申さねばならぬ。それ故、如何に高價な書籍でも、或ひは如何に廉價な書籍でも、畢竟するに唯一の、最も重要な條件を具備したるもの——即ち研究の目的に適合してゐるといふ上に於ての良書であらぬ限りは、先づ以て之を購入することを得策に非ず

と考ふべきである。然るが上に、さういふ良書の集團を今日世上に求めるといふことからして、實は第一に至難な業であるとして見ると、いよ／＼書籍涉獵法は、今日一般の獨學者の迂濶に採用の出來たものでないことを悟り得るであらう。

△讀書の本領に至つては一般の讀書法と大差あるなし▽ しかも書籍の選擇、買入れなどは、いはゞ「讀書の準備」に屬してゐる仕事なので、なほ其の上に「讀書の本領」が控へてゐることを忘れてはならぬ。讀書の本領は、即ち讀書といふ仕事の正味の部分で、學術研究の本領また此所に在る譯であるから、肝腎要なのは是れ以上のもの無しである。さうして讀書の本領たる「如何にして書を読むべきか」といふことが、謂はゆる讀書法の骨子となるので、一般の讀書法にあつても、はた又、獨學法としての讀書にあつても、その骨子たる部分は相似たものであらねばならぬ。殊に書籍涉獵法てふ別名

を以て、こゝに述べつゝあるものは、要するに獨學の方法として讀書をば唯一の手段となし、しかも其の讀むべき書籍の種類をば甚だ廣く「普通の書籍」に限るとしたばかりで、格別、讀書の本領にまで立入つて何う斯うすると言つた譯なのでないから、従つて讀書法の骨子に至つては、矢張、一般の讀書法に共通した原則が、大部分そのまゝに、書籍涉獵法に當嵌まるものと思つて可いのである。さういふ讀書法は、後に改めて之を講述するの要がある。たゞ併し讀書の本領たる部分に於て、書籍涉獵法が最後の効果——讀書の効果、即ち學術研究の効果——に多少の影響を及ぼすの點に就いては、終りに臨んで、なほ聊か獨學者諸君の注意を乞うて置くの無用ならざるを信ずるのである。

△金錢問題以外、時間問題もあり勞力問題もあり▽ 手短かに言ふと、かの學校生徒の教科書、參考書類は勿論のこと、其他普通の書籍といふもの、

多くは獨學用として著述編纂されたものでない悲しさには、イザ之を讀みつ
つ目的たる學術の研究をなさんとするの際に臨んで見ると、一般の獨學者は
當然、或る一種の不便利を感じざる譯には行くまいと思ふのである。先づ
第一は讀書經濟の點で、就中『金錢』に關する事だけは、ザツト上に述べて
置いたが、經濟は常に金錢に關するのみではない。『時間』の問題もあれば、
『勞力』の問題もある。普通の書籍は概して獨學者の使用に適せざるものとす
れば、強ひて之を繙讀するがためには無益に勞力と時間とを費すことが多く
なるは、蓋し自然の勢ひであらう。既に「群書を歴覽する」といふのでも、
その假染めならぬ仕事であることが推知し得られるので、殊に其れが趣味を
中心とした小説、講談本の類だとか、娯樂的の雜誌だとかいふものは選を
異にし、自體面白くも可笑しくもない知識を專一とした書籍、眞面目で、加
之に早呑込みが仕憎くて、たゞ肩が凝るばかりといふやうな學術を内容とし

た書籍とあるから、全く以て、並大抵の事ではない。その一大特徴は、單に
一部又は數冊の書籍を初めから終りまで、義理一遍と言つた如くに讀み通し
て仕舞ひさへすれば、必ずしも其れで能事足るとしたものでない——まだ
まだ他に種々の手数が要せられるといふ邊に在る。後に述ぶるが如く、學術
研究の手段としての讀書法が大いに考へられねばならぬ理由、また此所に存
してゐる譯である。それなのに、書籍そのものが不良なりとすれば、獨學者
は餘計に骨を折つて之を讀まねばならぬ勘定になる。

△精神的苦痛（精力の浪費、不快の惹起など）は更に大損失なり▽ そも
そも時間、勞力の損失が、單に其の損失たるのみにては濟まず、同時に又そ
れが直ちに金錢の損失を意味する位なものである。が、更に大なる損失と稱
すべきは、さういふ讀書のために、獨學者が常に感ずる精神的苦痛——徒ら
に人間の精力を消耗し去るのみならず、心中の愉快を奪はれることや、延い

ては讀書の上に何等かの障礙を持來たして、或ひは其の効果を空しうせしめたり、或ひは中途に於て其の事を挫折せしめたりすることなどで、これら無形的の損失は、時に人間の一生を通じて、もはや償ふべからざる程のものさへ有らうと思はれる。さうして此等の損失に關する事は、寧ろ經濟上の利害を超越したる別種の利害問題を意味するものと謂つて可からう。

第七節 讀書が唯一無二の獨學法たる場合

△例外としては是れ以上の良法を見出され難き少許の場合▽ 夫れ然り。かるがゆゑに一般の場合に就いて言へば「書籍涉獵法」即ち普通の書籍を以て唯一の研究機關とするものは、獨學法として、はた讀書として、要するに勞多くして効少なきものたるに止まり、決して最善の方法と稱すべからざること最早や疑ひを容るゝの餘地がなからうと思ふ。勿論、原則は斯くの通り

である。が、これに對しては、また少許の例外も有らうといふことを思つて見なければならぬ。かの實物研究の如きを別とし、昔は此の書籍涉獵法が殆ど唯一の獨學法であつたといふことを、前に言つたが、あながち昔に限らず、今日なほ依然として、或る特別の場合には、それが唯一無二の適當なる獨學法であることを承認しない譯には行かないのである。或る特別の場合とは、この方法より以上の良法に依ることを得ざる場合——例へば、講義録を以て主たる獨學機關となす能はざる場合の如き、即ち是れである。普通の書籍に代ふるに講義録を以てした獨學法は、今日最善の方法なることを信じてゐるが、たゞ憾むらくは、かの通信教授機關なるものが比較的近時の發達に係り、未だ必ずしも完全なる獨學機關たるの域に入つて居らぬ事で、その結果、理想としては最善なるものも、事實に於ては然らずといふやうな矛盾を見ることも往々あるやうな譯である。殊に學術の種類によつては世に講義録

の備はつて居らぬことが少なくない。日進月歩の學術、まして其れが専門的となつて來れば來るほど、いよく通信教授機關の缺乏を嘆せざるを得ないやうになるのである。然う云ふことになれば、獨學者は普通の書籍に依頼するより外に策がない。

であるから、或る程度の教育既了者だとか、際限なく學術の研究に従事してゐる學者だとか、學問を一生の事業なりと心得、殊に讀書を朝夕の日課としてゐる紳士淑女だとかいふやうな、普通の獨學者に非ざる獨學者にとつては、やはり書籍涉獵法が殆ど唯一——原始的な學問の仕方たる實物研究の方法以外に於て——の學術研究法となつてゐないことは無い。なほ又、講義録を主たる獨學機關としてゐる者が、同時に其の從たる機關として、普通の書籍を使用することあるは勿論の話だけれども、從たる獨學機關としての、普通の書籍の價值その他は、今しばらく言ふことを略して置く。

△初學者やビジネスマンの爲めには得策と謂ふべからず▽

右に掲げたやうな特別の場合に採用せられるのは是非なしとして、一般の場合、書籍涉獵法の如きは、到底、獨學法の最善なるものと看做すことが出来ないのである。就中、初學者の採用すべき獨學法としては、今日もはや舊式に屬して仕舞つたもの、觀がある。實際、獨學者の多くが學問以外に「本業」を有する人——商業、工業、農業その他に従事してゐる所謂ビジネスマンであるものとしたならば、それは種々の點より見て、甚だ得策でない方法であると言はなければなるまい。之を要するに、讀書法は一般の學術研究法中にあつて、もどより首腦たるの地位を占めてゐるものである。併しながら、普通の書籍を以て主たる獨學機關とするもの即ち書籍涉獵法といふものは、決して唯一の讀書法である譯でもなく、また勿論、唯一の學術研究方法である譯でもない。かの「書籍萬能」とする誤信などに胚胎して、輕々しく此の方法に依頼

し、はては無駄骨を折つて、たゞ「不具の學問」をしたことに終るが如きは蓋し其の愚や及ぶべからずであらう。

實物研究即ち直接的研究法は一補助法

凡そ吾人が研究の目的とする所のものは、宇宙間に有りて有らゆる事物の中の何かであるが、師にも就かず、書籍にも依らず、直ちに其の事物に接して之が知識を得んとするのば、いはゆる實物研究で、師に就いたり書籍に依つたりするのが間接的研究法ならば、實物研究は直接的研究法と謂うて然るべきである。實物研究のみである學問の仕方は、最も極端なる獨學であると共に、學問の仕方としては最も原始的なものである。蓋し學問發達の歴史から言へば、すべて事物の研究は、先づ實物研究に初まつたものに外ならない。併し學問が追々發達して來て、大分量のものになるに、もはや實物研究のみでは其の悉皆が仕盡せなくなる。今日、實物研究は一の補助法と云つたやうな地位を保つてゐるに過ぎない。此の如く學問それ自身も、學問の仕方も、時代と共に進歩するものであることを忘れてはならぬ。

第十二章 通信學校——通信教授機關の性質及び種類

第一節 講義録及び之に依る獨學の流行

は是か非か

△今日最も新式にして且つ最も進歩したる獨學法なり▽ 普通の學校に入る代りに、通信學校又は通信教授機關なるものに就いてする學問の仕方——さうして、普通の書籍を以て主たる研究機關とせず、之に代ふるに講義録といふ一種特別の書籍を以てするものは、グット切詰めて言ふと、即ち「講義録研究法」で、これ恰も「普通の學校に於てする學術の研究法」とあるべきを省略して、單に「學校研究法」(通學法の一變名)と呼ぶのと同筆法であるが、それは兎に角、この方法は今日最も新式にして且つ最も進歩したる獨學法

なりと稱することが出来さうに思ふのである、また事實に於ても、既に今日の獨學者間にあつては、講義録に依つてするといふのが、寧ろ普通一般の事となつてゐるやうな觀なきにしも非ずで、それほど講義録研究法の價值が世に知られてゐるのかと思ふと、大いに頼母しく感ぜられた次第だが、さて又退いてヨク／＼世間の真相を考へて見ると、さほど樂觀してばかりゐる譯にも行かぬやうな氣がするのである。

△發行する方も發行する方なら購讀者も購讀者▽ 何故かといふに、今日世間で、講義録を發行してゐる向々は非常に多いが、全體の様子が何となく神聖なる學術の教授をなすの機關たることを忘れて、普通の書籍を賣出す場合と似たり寄つたりの、頗る盛んな——といふよりも寧ろ品位の無過ぎた廣告手段を採つたり何かして、ひたすら購讀者を招致するの策に腐心し、日を逐うて其の競争を激烈ならしめてゐるかの如く見ゆると同時に、世間の人

もまた自然に其の方へ吸引せられるかして、殆ど一種の流行品に對するやうな具合に、必ずしも鞏固なる獨學の精神を有するに非ずして、やゝ無意識的に講義録を購讀して見るといふ風すら生じてゐるらしく想像せられるのである。ロクに講義録の意義をも解して居らず、之に依つて學問を修めるといふことに就いて、何等の徹底した思想をも有するなく、而して多くの人が講義録を購讀してゐるといふのであつては、どうして頼母しいどころか、寧ろアベコベに、お座の冷めた話だと謂はざるを得ない。

△這般の不眞面目は教育の權威と學問の價值とを損傷すること甚大▽ いやしくも學問をするのに、譬へば虛榮心の強い婦女子が三越呉服店のやうな所で買物をすると同様な態度を以て、ウカ／＼と、無意義な流行などに囚はれて仕舞ふやうなことでは不可ない。それは浮華輕佻に傾いた人と謂ふべきである。若し夫れ講義録を發行する側も、不眞面目な商賣人魂情に驅られて

大切な使命を疎かにするの程度に下落を來し、それに比例して其の購讀者である獨學者の側も、同様に不眞面目な、冷淡な心持ちで以て通信教授機關に對し、且つ學問といふ仕事に對するばかりとなつた日には、世も早や末で教育の權威も學術の價値も悉く地に墜ちて、ト、の詰まり獨學なんぞは、さながら履き古して下駄の如くに安い物となつて仕舞ふであらう。又、そんな事になつたのでは、獨學の效果必ず著しきを得ず、従つて其の學問は底の知れたものであるに相違ない。申すまでもなく、吾人は世の獨學者に對して右の如き學問の仕方せよと勸め度くないのである。それ故、この一章を割いて、特に通信教授機關と講義録の性質を説くべき部分とした。勿論、世の事實に就いて見るに、必ずしも理想的ならずと思はるゝ節が少なくないけれど、こゝには進んで理想の一端まで述べるの考へである。さうしたら、幾分か世俗を警醒せしむるの足しとならぬ物でもあるまい。

第二節 通信學校即ち通信教授機關とは

何ぞや

△通信教授機關と其の主たる通信材料▽ そも／＼講義録は「通信學校」(Correspondence school)の發行するもので、いはゆる通信學校とは名詮自稱の、一に通信 (Correspondence) の途に依つて學術の教授をなす機關に外ならない。即ち通信學校そのものが既に一種特別の學校なのである。ところでその通信材料の主たる部分となるのは、無論、學校の教場に於て教師が講述した所を其の通りに筆記したのと同様のものである——要するに「講義の記録」であるといふやうな意味から、最初その文字通りの名が附けられて、終に今日では一般に普及した次第でがなあらう。かくの如く、講義録の内容は至極簡単に言つて見ると、たゞ「講義」といふ一語に掩はれてしまふ譯であ

るが、さて此の講義の成立ちをば仔細に解剖して、だん／＼調べて行くと、随分手数の掛かつたものであることが知られるのである。もつとも講義録の形式には、別に一定の規則も無いやうである。例へば、グット略式の、普通の手紙を距る遠くないやうなものであらうと、又は其の反對に、大いに立派な印刷物の體裁を成したものであらうと、敢て其の講義録たるの性質には影響する所があるまい。けれども今日一般の事實としては、普通の書籍と大差なき形式が採用せられてゐる。のみならず、普通の書籍も、また學術の講義を以て其の内容とすることがあるので、果して講義録の何處が其れと異なつてゐるかは、思ふに諸人の聊か識別し易からざる所であるかも知れない。しかも斷じて兩者の混同すべからざる點は、一は通信學校の發行するものであつて、他は即ち然らずといふ所に存してゐる。さうして又、凡百の相違が此の源泉より湧いて出ると謂ひ得られるのである。

△通信學校と講義録とは結合して一の獨學機關を成す▽ とにかく講義録は必ず通信學校の發行するので、通信學校があれば、講義録は屹度それに附いてゐる。又、講義録があるに云へば、當然その背後に通信學校が立つてゐるものと思はなければならぬ。何れにしても講義録と通信學校とは互ひに結び着いてゐるものであるから、その一方ばかりを分離させて考へると云ふ譯には行かぬ。獨學の機關としては、二ツが投合して一個のものとなるのであると見るを至當とする。

△一種特別の學校と一種特別の被教授法▽ 嘗て著者は講義録研究法に「被通信教授法」といふ別名を附して見たことがある。これは即ち「通信を以て教授せられる方法」といふ意味で、例の「被教授法」と單に稱したのと同筆法を用ひたものに過ぎない。かの通學法即ち學校研究法が主として此の被教授法より成立つてゐるものであることに、改めて架説するの要がなから

う。ところで、講義録研究法は何うであるかと思ふに、これは無論「學校に於てする學術研究の方法」たるに非ずして、所謂「スターデー、アット、ホーム」即ち「我家に於てする學術研究の方法」に屬してゐながら、同時に又、一種特別の被教授法たるの性質を兼備してゐるといふ譯なのである。もとより通信教授は、尋常の教授とは同じくないが、しかも學術の教授を受けるといふことは、講義録研究法と學校研究法とに共通した觀念であらねばならぬ。であるから、講義録研究法は獨學法なりと雖も、少なくとも其の性質一半は、殆ど學校に於てする研究法と選ぶ所がないものである。之を約めて言ふと、通信學校は一種の學校であると共に、講義録に依つてする研究法は、やはり一種の學校研究法に相違ない譯なのである。既に然らば此の講義録研究法といふものが、かの實物研究の方法（最も極端なる獨學と云へるは矢張り此の方法に外ならず）や、書籍涉獵法などの如き「むかし〜」流の獨學法に比

較しては、遙に卓越したものであるといふ所以、また明瞭であらうと思ふ。△多くは通信學校と名乗らずして通信教授機關と稱す▽こゝに聊か注意すべきは、事實に於て、我國では陽に「通信學校」と名乗つてゐるものが甚だ少ない事である。ツイ此間までは其の例が皆無であつた。著者の記憶する所によると、漸く明治四十四年頃の創立に係る大日本通信中學校が初めて通信學校と稱したもので、それから以後に通信農學校などが現はれた。が、この類は僅かに一部たるに止まつてゐる。そも〜我國に於て「通信教授」といふことを開始したのは、例の早稻田大學で、これ普通の學校にして此の事業を兼營するものに過ぎぬから、ことさら通信學校と號せず、單に同大學の出版部より講義録を發行するものとしてゐる。その他、普通の學校にして通信學校を兼ねたもの、多くは早稻田大學と同一の轍を履んでゐるのである。而して又、普通の學校以外に獨立して此の事業を經營してゐるものは、大抵

「何々會」といつたやうな名稱を用ひてゐるので、それは普通の學校と同様
たゞ其の看板を一目したのみでは、必ずしも講義録を發行する所であること
が知られない。かくの如くであるから、我國では通信學校といふ名は寧ろ通
りが悪いので、まだ通信教授機關といふ稱呼の方が一般の了解する所とな
さうである。併しながら通信教授機關と通信學校とは全く同じもので、少
くとも其の性質だけは、判然普通の學校以外に獨立した——即ち一種特別の
學校であることを拒むべからずである。

△普通の學校は舌の教育、通信學校は筆の教育▽ 更に之を言へば、通信
學校なるものは、普通の學校が之を兼ねてゐると否とに論なく、その性質は
全く普通の學校から區別して見られなければならない。さればとて、兩者の
性質は何も雪と炭との如くに變つてゐるといふ譯でなく、寧ろ相似た所が多
いのである。既に述べた所によつて明かなるが如く、兩者は共に學術の教授

をなす機關である。ひとしく教育機關である。たゞ其の異なる所の要點は、
一は通信によつて教授をなすに反し、他は學校の教場に於てするといふに在
る。後者は教師が學術を口授するものであるに反し、前者は紙上に之を書い
て示すといふに在る。一層これを碎いて言へば、甲は「舌の教育」乙は「筆
の教育」であるといふのが、その顯著な相違たるに過ぎない。而して「筆の
教育」は通信の便を借りて授けられる。その通信を掲載したもの、一般に書
籍の形式を以て發行せられるもの、これぞ即ち講義録てふものに外ならな
い。

第三節 普通の書籍と講義録とは似て非なり

△兩者は第一根本の成立ちからして大に異なる▽ 通信學校の發行する講
義録は、畢竟一種の書籍である。全體、普通の書籍と云つたところで、こと

に其の學術を内容としてゐるものは、或る意味より之を言へば、やはり『筆の教育』を目的として發行されるものに外ならない。この點に於て、普通の書籍と講義録とは相似たものである。少なくとも講義録の性質一半は普通の書籍と同じだと謂ふことが出来る。果して然らば、講義録研究法も、亦これ一種の書籍涉獵法に過ぎないやうである。けれども兩者の相違は必ずしも些たるものでない。蓋し講義録と普通の書籍とを比較して見ると。第一、その根本の成立ちから大いに異なつた所がある。既に獨學の機關としての、普通の書籍に就いては、前章に於て其の主なる缺點を指摘して置いたが、今、講義録の場合となつては、殆ど正反對の事を言ふ必要がある。即ち講義録の長所は、普通の書籍に於ける短所その儘を轉倒したるの觀があるので、これは本來の性質が大差あるに基く結果であらねばならない。所詮、講義録は多くの點に於て、普通の書籍と區別して考へらるべきもので、従つて又、之に

對する購讀者の態度、購讀の方法などにしても、多少共に變つて來なければならぬ筈あるが、たゞ一般の讀書法の範圍に屬する事は、普通の書籍と講義録とを一括して、他日再び之を細説するの時まで預かつて置き、こゝに先づ成立ちの差異に關して一言を費すに止めよう。

△講義録は天下一品の獨學用書たるべき使命を有す▽ 凡そ講義録は其の性質として、最も完全なる獨學用の書籍であるやうに編纂されねばならぬものである。これは實に講義録固有の性質、最初よりの約束であると謂つて可い。世に獨學の機關たり得べきものは乏しからずだが、しかも専門の獨學機關といふものに至つては、恐らく講義録以外には皆無だらうと思ふのである。それだけ又、獨學機關として講義録には他に見るべからざる特徴の大なるものがあつて然るべきで、この點に於て、普通の書籍などは何としても一歩を譲らなければならぬ。かの學校生徒の使用する教科書、參考書類の如

きは、やはり其れだけのもの——いは「**學校生徒用書**」に過ぎないもので講義録とはチト其の向きが違つてゐる。その他、如何なる種類のものでも、普通の書籍は、要するに「**一般用書**」とでも名づくべきものに外ならない。然るに講義録を以て書籍の一種と看做せば、これこそ天下一品の獨學用書である。否さうあるべき使命を有してゐるものと謂はなければならぬ。

△**學術の獨習用書として見たる普通の書籍と講義録との相違**▽ 勿論、普通の書籍中にも、學術の獨習用書を以て目すべきものが無いのではない。寧ろ澤山ある方である。例へば英語の初學者に對して作られた「**ナショナル第一讀本獨案内**」といふ類の如き、即ち其の一種であるが、是等は殊に古くから行はれてゐる。今日では斯ういふ書類も段々進歩して來て、隨分立派なものが見出されるやうである。けれども普通の書籍である限りは、第一に内容の貧弱なるを免れない。今日の學術は、之を書籍に盛り上げて見れば、大抵

その内容が非常に豊富なものとなる筈である。ところが、普通の書籍一冊の中に收め得べき知識の分量は先づ知れたもので、學術としては、恐らく淺薄なもの、若しくは偏狭なものに過ぎまい。獨案内一冊では、到底、英語の初歩だけでも満足に修めることは出来ないのである。之に反して講義録は、おのづから書籍の大集團を成し、全體として統一を有し、さうして一科の學術的知識を組織してゐる點に於て間然する所なきものでなければならぬ。畢竟するに學術の獨習用書として、その内容たる學術の完全なものは、ひとり之を講義録に求め得べく、普通の書籍には望むべからずであらう。もし又、普通の書籍にして、完全なる獨學用書と見るべきものがあれば、それは既に講義録に屬してゐるので、普通の書籍ではないと謂うてもよからうと思ふ。

△**書籍の著述編纂と學術の教授とは必ずしも相同じからず**▽ 獨學用書として見たる講義録と、普通の書籍との優劣は、右に止まらない。就中、その

編纂方法に大相違があるやうである。普通の書籍は、獨學用書として之を見るとき、概して著述の仕方が不親切である。投げ遣りである。學術の講義であるとするれば、その講義が仕放してある。一言を以て掩へば、講述の方法が著者の自己本位で「讀者の爲め」といふ用意を缺いてあるものが多い。一般の獨學者のために了解し易いものとするなどいふ、特別に深い親切氣が紙上に溢れてゐるやうな書籍は、極めて稀にしか見當らない。たゞ時として讀者本位と思はれるやうなものがあるのは、著者その人が文章の技術に長じてゐる所から、自然に「讀者のため」のものを作り上げる位な事であるらしい。かくの如きは、按ずるに講義録と普通の書籍とは、その根本の成立ちが異なつてゐるからである。普通の書籍には著述の精神が主となつてこそ居れ、教育の觀念といふものは餘り含まれてゐない。作文法の奥義を知ると否とを問はず、著者には唯だ「書籍を編纂する」といふ考へがあるばかりで「讀者に

教授する」といふ心の者は少ないのである。その結果として、普通の書籍にあつては「教授法」なども殆ど度外視されることになる。然るに講義録は教授法を度外視することが出来ない。それは學校の教師に代り、教科書に代るものであるから、常に讀者に教育を授けるといふ念慮を有して居らねばならぬので、普通の書籍に於けるが如く、一に著述編纂を主意としてゐるといふ譯には行かぬのである。之がために、講義録の内容は最も親切な講義となり獨學用書として申分の無いものとなつて來べき筈なので、これは講義録の普通の書籍と似て非なる要點の一たるを失はない。

△但し世間の講義録は皆な理想通りのものと早合點する勿れ▽ 但し以上は、やゝ理想の講義録を説くに偏したもので、今日世間に見る多くの講義録が、みな此所に述べるやうな理想通りの講義録になつてゐるものと早合點されては、聊か困る次第なのである。米國などには、餘程以前から普通の學校

以外に獨立した通信學校といふものが澤山あつて、それ／＼目的とする講義録を發行し、盛んに其の事業を經營してゐたものである——否、現在に於てもまた然りだ。我國には通信學校の名を用ひてゐるものこそ其の割合に少ないやうだけれども、とにかく講義録を發行してゐる通信教授機關なるものが甚だ多くなつて來たことは争はれない。實際、今日は米國式の經營法を模倣した遣り方をするものなごも屢々散見される程の狀況とはなつたのである。併しながら内外を通じて、此種の機關中には寧ろ營利的事業として企てられたものが、又その數乏しきに非ざる如くに思はれる。營利的事業、必ずしも悪いのではないが、普通の書籍にも、營利を目的として發行せられるものゝ然らざるものゝがあつて、ために、往々「書籍ならざる書籍」を混じて來ることがあると同様に、すべて營利的事業には固有の弊害を伴ひ易い所から、講義録も時として有名無實のやうなものとなる例がある。さなくとも、事實

は理想に及んで居らぬものが珍しくない。それ故、講義録の價値も矢張り一ツは事實の問題であることを記憶して置かれ度いのである。

第四節 普通の學校より發行する兩種の講義録

△數十年前と今日とは斯くも隔世の相違を有す▽ そも／＼日本では、最初に講義録を發行した所といふと、やはり早稻田大學であらう。同大學の前身たる東京専門學校は明治十五年に創立された。それから四年を経て、明治十九年に「政學講義録」といふのを創刊したが、これを我國に於ける通信教授といふ事業の嚆矢を成したものであるらしい。明治年代では餘り古くもないやうだが、帝國憲法の發布に先だつこと三年、さう新しい方でもないのだ。言ふまでもなく、當時は未だ天下に學術の研究機關たる學校と書籍とが

缺乏してゐた。勿論、缺乏してゐたとは云へ、とにかく維新後、既に二十年
足らずを過ぎてゐたのであるから、かの幕末の頃、篤學の志士が數多世に出
ながら、往々にして和漢の書一部を手に入るゝの便だに得られず、辛うじて
他人の所藏せるものを借受け、徹宵手寫することさへあつたといふ程に甚し
いのではないが、併し學問が大いに勃興して來て、海内の青年は風を望んで
之に志を寄せた當時であるにも拘らず、なほ且つ彼等は洋書に依り、洋人
に就くに非ざれば、高等専門の學術を修むること能はずとしたのが實際で、
かくの如き不自由な時代に、早くも東京専門學校が講義録の發行を始め、海
内幾多の志學青年をして、たゞに讀書の渴を癒さしめたのみならず、座なが
ら學校に就くと同様の思ひあらしめたのだから、彼等が翕然として「政學講
義録」の下に集まつたといふのも、あながち怪しむには足らない。政學の今
日より見れば、うたゝ隔世の感なきを得ざる次第だが、しかも其の今日ある

の機運は、まつたく當時に端を發してゐる譯と知られる。

斯く東京専門學校が初めて「政學講義録」を發行し、果然、一世の稱讚と
満足を得るといふと、他の學校などに於ても亦この轍を履んで講義録を發
行するの風が、勃然として興つて來た。さうして、甚しきは普通の書店のや
うな所で、それを模倣して講義録と稱するものを發行することさへあるに至
つた。——だん／＼餘談に深入りするやうだが、講義録の性質を解する上に
於て役に立つ知識であるを信じて、なほ少々、我國に於ける講義録發達の歴
史に就いて言うて見る。

△普通の學校が普通の學校として發行する講義録▽ さて、上述の如く講
義録は、その初め普通の學校が發行したものである。學術研究の機關たる學
校も書籍も、二ツながら缺乏してゐる時代に、一種新式の獨學機關として世
に現れたもの、それが即ち講義録であつた。併し此の講義録は、専門の通信

學校といふものがあつて之を發行したのでなく、従つて其の内容の如きも、また必ずしも完全なる獨學用書として見るに足るものではなかつた。たゞ學校の教場に於てする講義を記録し、廣く世間の志學者に頒布するの趣旨を以て出版されたもので、要は講義の記録たるに止まり、今日の講義録から見ると、よほど單純な性質のものであつたことは争はれない。更に繰返して言ふと、學校の講義を校外に在つて聴くの思ひあらしめたものに過ぎないので、早稻田大學が其の講義録を購讀する者に「校外生」の名を與へたのは、まことに當を得た話と思はれるが、しかも普通の學校は、依然として普通の學校で、同時に通信學校を兼ねてゐるといふやうな特別の態度に出た譯でなく、いはゞ學校の一副産物たるが如き講義録は、さほど重大視されてゐなかつただけ、それだけ又、講義録としては幼稚の域を脱し得なかつたやうである。

△事實「普通の學校兼通信學校」として發行する講義録▽ 即ち右に申し

たやうなのが初期に於ける講義録で、つまり講義録の起原は、普通の學校より發行する講義録であつたが、併し今日の講義録は、ひとり此種のものに止まるのではない。東京専門學校に次いで、他の幾多の専門學校——後には何れも私立大學となつたものが、それ／＼同種の講義録を發行するやうになつたとは云へ、今日は最早や其等の講義録とても——但し一概には言はれぬが——昔ながらの面影を保つてゐるものは稀れである。どの講義録を見ても、多少共に進歩した跡が認められる。さうして今日、普通の學校にして講義録を發行してゐるものは兼ねて又、自ら通信教授機關たるを以て任じてゐるらしき態度が明かに見えるのである。斯かる學校は、即ち之を普通の學校兼通信學校と看做すのが至當だらうと思ふ。今日、早稻田大學などの發行する講義録は、既に事實「普通の學校」より發行する講義録である時代を去つて、寧ろ全く普通の學校兼通信學校より發行する講義録たるの時代に入れるもの

ではなからうか。

△兩種の講義録は當然その性質を異にせる所に注意せよ▽ 普通の學校が矢張り其儘「普通の學校」として發行する講義録と、更に一步を進めて「普通の學校兼通信學校」として發行する講義録とは、當然その性質がヤ、變つたものとなつて來なければならぬ。獨學の機關として見ると、前者は大いに物足らぬ所がある。後者の方がヨホド理想に近い。併し前者、即ち普通の學校より發行する講義録といふものが、今日なほ事實に於て、一種の講義録として残つてゐることは、須く獨學者の注意すべき事である。

第五節 普通の書店其他より發行する疑問の講義録

△普通の書店より發行するものは普通の書籍に非ずして何ぞ▽ 兎に角、

講義録は最初普通の學校が發行したものである。然り而して「學校の教場に於てする講義を記録したものである」ならば、それは學校から發行されるのが當然と謂はなければならぬ。之に反して、學校以外の所に講義録の生産があるといふことは、チト奇妙な現象と見えたのである。前にも申したやうに講義録が流行すると、普通の書店などが學校の眞似をし出した。が、普通の書店より發行する講義録は、長持ちをした例が少くないやうである。元來書店は教育機關でない、故に普通の書籍や雜誌などの發行所となるのは相當してゐるが、講義録を發行するのは柄に無いことだ。もつとも講義録といふ名は一の「美名」たるを失はざるのみならず、當初は殊に新奇なものであつたから、商機を捕へるに敏なる書店などが之を餌にして學に飢ゑてゐる者を釣らんとしたのは偶然でない。かういふ事は過去に限らず、現在また往々にして之があるので、甚しきは普通の書籍と少しも變らぬものを發行して、それ

に講義録の名、又は講義録に紛はしい標題を冠して賣出すさへある。所謂「羊頭狗肉」とは斯かる商賣の仕方、少なくとも其の講義録は信用すべきものでない。勿論、講義録と稱すると否かを問はず、普通の書籍中にも、その内容が眞個に學術の講義録であるものも有るのである。が、それは畢竟するに講義體の書籍と云つたやうなものか、さなくば例の在觸れた獨習用書の類か、その一冊々々は、恐らく講義録の如くに完成された一科の學術——全體的知識を授けるものでなくて、やはり斷片的知識——部分的の學術を授けるものに過ぎないのであらう。もし教育を以て之を目すれば、何としても「書籍的教育」たるに止まり、「學校的教育」と成り得るものでない。であるから、普通の書店から發行されるものは、名は何と云つても、やはり其實物は普通の書籍であるを免れないと思ふのである。

△自ら通信教授機關と化するか唯だ取次頒布を引受くるのみか▽ 苟も講

義録と云へば、普通の書籍とは其の選を異にし、いはゆる學校的教育を授くるものでなければならぬので、この點に於て、普通の書店などは講義録發行の資格が無いものと見るべきである。さうして之を發行するの資格ある者は結局、普通の學校か専門の通信學校か、兎にも角にも學校的教育機關と稱し得るものに限るといふことになる。講義録を發行する所、之を呼んで通信教授機關と云ふのであるが、この通信教授機關なるものは、即ち講義録を通じて世の人に學校的教育を授くるものに外ならない。それで、書店の如きも講義録に依つて學校的教育を授くべき設備を整へた上、之を發行するものとするれば、もはや通信教授機關に化したものと謂へよう。或ひは又、別に立派な講義録の發行所がある場合に、書店が唯だ其の取次頒布だけを委託されるやうなことは、もとより不可能でない。それは營業として成立つのである。さうして其の營業は、普通書籍の卸し小賣りと選ぶ所がない。即ち書籍の通

信販賣を委託されてゐるのと同じ譯であるが、しかも書店自ら通信教授を行ふのでないことは勿論であらう。

△學校とも付かず書店とも付かず、正體不明の所より發行する講義録▽
之を要するに、普通の書店などより發行する講義録は、寧ろ似て非なる講義録が多いので、就中、最も甚しきは、學校とも付かず書店とも付かず、殆ど正體の知らぬ所より發行する講義録で、頗る怪しいものに富んでゐる。この怪しい講義録は、過去より現在に至るまで、絶えず世間に出没してゐるがその盛衰興亡は走馬燈の如くに多忙を極めてゐるので、一々捕捉して語るに由なしである。併しながら悪い事は無きもので、この混沌たる状態はやがて専門の通信教授機關、即ち通信學校なるものを産み出すに至つた。専門の通信學校より發行する講義録、これこそ最新の發達に依るもので、且つ今日、其數の最も多いものである。普通の學校兼通信學校（早稲田大學は實

に其の巨擘）の發行するものと、専門の通信學校（例へば實業之日本社内創設された帝國實業講習會の如き、明かに The Imperial Correspondence School of Commerce 即ち邦譯「帝國商業通信學校」と稱してゐる）の發行するものとは、今日の講義録界に於て互に其の雄を争ひつゝあるが、兩者の優劣は蓋し大問題たるを失はない。

早稲田大學出版部と大日本青年修養團

最近に早稲田大學出版部は大日本青年修養團といふのを設立して「大日本青年講習録」と稱する一種の講義録を發行し始めた。その目的は「全國青年の爲め新時代に必要なる知識及び道徳の修養に資する」に在り云ふので、つまり地方青年の修養を目的とした講義録である。此種の講義録は、同大學に先んじて發行してゐた所もあるが、同大學は最も大規模に之を始めたのである。併し地方青年の修養といへば、頗る「廣い學問」を意味することになるので、かういふ學問を授けてゐる學校は未だ無い。こゝに至つて講義録の「學校の講義を記録したもの」といふ性質は全然ゼロになつた。こゝに至つて同時に、早稲田大學出版部が半ば同大學より獨立して、殆ど専門の通信學校に化し來らんとしてゐる消息を窺ふに足るのである。世人は能く此の性質を了解して通信教授機關の價値を判断しなければならぬ。

第十三章 通信教授機關の發達並に講

義錄選擇法

第一節 通信教授機關の發達、講義錄の全

盛時代

△發達の歴史よりすれば凡そ三期の講義錄に分たる▽ 今日我國で講義錄を發行してゐる所の數は甚だ多いものとなつた。従つて其の授くる教育の種類及び程度もまた區々たるものがある。勿論、これは一朝一夕に斯うなつた譯ではない。經てば早いもので、我國に於ける講義錄發達の歴史も、かれこれ三十年からの星霜を送つてゐるが、ザツト之を區分して見ると、少なくとも三期位になりさうである。先づ第一には高等専門の學術に屬するものが講義錄の目的とされた。次ぎに起れるは中等普通の教育で、それから最後に至

つて社會一般の物事に及ぼしたといふ順序である。(聊か前章に述べた所と重複を來す氣味はあるが、なほ全體の講義錄界を大觀し、殊に其の現在如何の真相を有するものなるやを審にするの一助たらしむるため、再び過去と現在とを結び着けて、やゝ前とは異なる方面より之に視察を加へて行くものと御合點に預りたい。)

△第一期——高等専門の學術を目的とするもの▽ 主として高等専門の學術のみが講義錄の目的とせられた時代は、まだ學問の勃興する初期を出なかつたので、中等教育さへ全國に普及して居らず、まして高等専門の學術といへば、極めて少數の篤志者によつて修められたのに過ぎない。そこへ持つて來て、講義錄といふものが全く其の時代の新産物であつたのみならず、之を發行する學校に於ても、敢て聲を大にして世人に其の購讀を勧めた譯でもなかつたし、たまたま學問に熱心な人があつて講義錄の事を知つたとしても、

まづ物の試しに購讀して見るといつた位なもので、眞面目に獨學の機關を以て目するといふことなどは寧ろ例外らしかつたから、やゝ講義録が流行し始めたとはいへ、それは實に狭い範圍に止まつてゐたものである。されば、早稲田大學其他の私立大學より發行する政治、法律、文學などの諸講義録、これらが當時に於ては殆ど全部の講義録を成してゐた譯であるけれども、しかも其の多くは校外に充分の購讀者を得る能はずして、校内生を以て有力なる購讀者とし——これ、講義録をして教科書、参考書類の役目を爲さしむるもので、純粹の獨學機關たらしめる所以ではない。否、或る場合には最初より校内生に之を頒布するのが寧ろ第一の目的であつたかも知れないのだ——辛うじて發行の費用を辨じてゐたといふやうな有様であつたらしい。何しろ此の時代に於ける講義録は甚だ振はぬものであつた。

△第二期——中等普通の教育を授くべき講義録▽ やゝ暫くしてから、世

間が中等普通の教育を授くべき講義録を求むるやうになつたのは、よほど學問が盛んになつて來た證據で、同時に、講義録に依つて獨學するといふ風が漸く一般的にならんとして來た次第なるを知るに足るものである。この時期に於て、例の早稲田大學は、初めて中等程度の講義録——殊に「中學講義録」を發行し出した。それは確か明治三十九年で、同大學が講義録といふものを創刊してから丁度、滿二十年を過ぎてゐたのである。この間に講義録そのものも可成りに進歩を遂げたことは想像するに難くないので、早稲田大學が殊に通信教授といふことに多年の經驗を有する由を聲言し、且つ之を以て一大なる誇りとしてゐるのも、あながち無理ではないと思ふ。

さて此の時代が講義録發達史中の第二期で、ソロ／＼と講義録界が賑かになつて來た。折しも早稲田大學を向ふに廻して巖然頭角を現はし、華々しく別天地の開拓に従事しつゝあつたのは、これも名高い大日本國民中學會で、

講義録界に於ける兩者の地位は、恰も雜誌界に於ける博文館と實業之日本社との對抗状態に似たものであつた。早稻田大學は一出版部を以て數種の講義録を發行し、斯界唯一の古參にして、且つ現在羈王たるの觀があつたに對し大日本國民中學會は最初その中學講義録だけに全力を集中した次第であつたが、新進氣鋭の勢ひ殆ど當るべからざるものありと見えた。

△専門の通信學校こゝに勃興し講義録に依つてする獨學の風を盛んとする▽蓋し通信教授の開祖は早稻田大學であらう。が、普通の學校以外に獨立した通信教授機關、即ち「専門の通信學校」として、最も早く世の認識する所となつたものは、他なし、この國民中學會なりと謂はずんばあるべからずである。國民中學會は自ら其の講義録を天下に向つて推薦するの手段として、大いに廣告を利用した。その廣告はチト藥が利き過ぎるといふやうな譏りを免れないかも知れぬが、同會の立場として其れも止み難き事でもあつた

らうし、且つ同様の廣告は追々に凡ての講義録が必要とする常套手段と化したやうな姿もあるし、とにかく此の事は暫く別問題として置き、こゝに唯だ斯界に一大貢獻の爲された點を擧げて見ると、普く世間に講義録の價値を知らしめ、通信教授を受くるの利益を鼓吹し、以て天下一般に獨學を行ふの風を盛んならしめたこと即ち是れである。勿論、この功績もまた凡ての講義録に之を歸せなければならぬ。既に教育は全國に普及して、子弟の中學校を卒業する者さまで珍とするに足らなくなつた。しかも其の志を有しながら種々の事情に妨げられて、身親しく學校に入ること叶はざる者に至つては、或ひは更に多數なるやも測り難いのである。この際、通信教授機關が彼等に獨學の途を與へたのであるから、全く以て時勢の要求に投合したといふ譯である。さうして講義録の購讀者が殖えて來ると、その結果は循環して今度は又著しく通信教授の發達を促すの原因となつた。今や將さに講義録全盛の

時代は來らんとしてゐる。殊に此の時代を以て、専門の通信學校の勃興する機運を迎へたことこそ、優に特筆大書に値ひするの事實であらう。

△中學及び女學講義の外、商業、工業、農業等の諸講義録あり▽斯くて通信教授機關は次第に繁昌して來た。「普通の學校兼通信學校」も「専門の通信學校」も益々その數が多くなるばかりであつた。就中、中學講義録を發行するものが一番に殖えた。先づ今日までの講義録としては、中學講義録位に多數の購讀者を吸収したものは無いだらう。恐らく其の總計は侮るべからざる數字を成してゐるだらうと思ふのである。これでホゞ天下の大勢が知り得られる。中等普通の教育を目的とする獨學者が最多數を占めてゐるのであることは疑ひを容るゝの餘地がない。ところで、中等普通の教育を受ける者は社會の中堅たる階級を代表する人々と見てよいのでだから、講義録發達の第二期に於ては、早くも通信教授に依つてする獨學の法が社會一般を風靡せん

とする兆候を示した譯なのである。もつとも這般の消息は、社會全體の風潮から來てゐるものに外ならないので、中等普通の教育を受けることは、既に此の時代に於て世間一般の徑路となりつゝあつたのであるから、獨學者の向ふ所も亦こゝに歸着したのは當然であつたらう。中學講義録に次いで生れたのは、女子教育勃興の反映たる女子講義録、實業教育の振起に伴ふ商業、工業、農業等の諸講義録、是等が先づ主なるものであつた。しかも其の多くは中等程度のものであつたのである。早稻田大學からも商業講義録を發行する大日本國民中學會からも女學講義録を發行する。なほ他の一方では日本女子大學の如き、初めて「普通の學校兼通信學校」の仲間入りをして、新たに一種の女學講義録を發行した。又、工業講義録、農業講義録などを發行する所も多くなつて來た。斯くして専門の通信學校と、普通の學校にして通信學校を兼ねるものとは、こもく増加して行くのであつた。

△第三期——社會百般の事物に及ぼせる多數の講義録▽

終に講義録は

百般の事物に及ぼすの時代が来た。これが發達の第三期である。今や講義録の種類は擧げて數へ難い位であり、しかも尙ほ跡からくと新なるものが産出されて、殆ど底止する所を知らざるの有様である。専門の學術も色々のものとなつた。英語、數學、作文、習字、簿記の如きは、寧ろ古いものである。或ひは藥學、或ひは蠶業、或ひは鐵道、或ひは航海學、また珍しい方ではない。婦女子側のものには家政講義、女子技藝講義、料理講義録、産婆講義録などがある。一般向きの珠算、支那語などの講義は、殊に専門的學術を代表してゐる。兎角、獨學者は純粹の學生であることは稀れにして、ビジネスマンが多きを占めてゐる故にや、講義録の目的とする學術は、自然に技術的、職業的もしくは實際的のものに傾き易いやうである。現に職業講義録といふ名さへ見出される。店員講義録もある。やゝ奇抜なものは神職講習

録といふのもある。更に進んでは日本畫、洋畫、演劇、俳諧などの講義録も現れ、柔術、圍碁、將棋などの講義録までも出て來るといふ勢ひである。就中、圍碁、將棋の如きは、全く「遊戯」に屬してゐるもので、その技術が學問たりや否やは大なる疑問と謂ふべきだが、何れにもせよ、通信教授の流行が斯様なものにまで及ぼしたといふのは、聊か驚くべき事實と稱せざるを得ない。なほ又、普通文官養成講義録、高等受験科講義録の如きも、よほど特別の性質を有してゐる。

△普通の學校兼通信學校も専門の通信學校も漸く面目を一新し來る▽

第三期に至つて、通信教授機關の發達は最も顯著なるものがあつた。普通の學校兼通信學校も殖えて來たが、同時に、その通信教授機關たるの色彩が大いに濃厚となつて來たことを看取せねばならぬ。例へば早稻田大學發行の諸講義録は、いづれも元は其の校内に於ける相當學科を背景としてゐたので、校

内に於ける政治科の講義録は、即ち其儘、校外生に對する政治科の講義録となつてゐると云ふやうな觀念が去らなかつたものだが、後には必ずしも然らざることになつたらしい。殊に其の中學講義や、商業講義などは、最も明白に此の事實を語つてゐる。同大學に商科も出來たし、所謂「早稻田學園」の範圍内には中學校もあり實業學校もあるが、しかも中學講義や、商業講義などは、その中學校、實業學校、又は商科の教授學課と一致してゐる譯ではない。即ち講義録は其の内容に於て、寧ろ學校自身から獨立してゐるものである。されば早稻田大學は、たゞ單に、普通の學校として講義録を發行してゐるものでなく、別に其の出版部の名を以て通信學校の業務を營んでゐるといふ立場が明白であらうと思ふ。要するに今日の通信教授機關としての早稻田大學は、昔日の東京專門學校から見ると、また大いに面目を異にしたものと稱すべきである。獨り同大學のみならず、他の講義録を發行してゐる學校、

多くは似たものであらう。それから又、専門の通信學校は最も多くなり、實際に於て「通信學校」と名乗るものさへ現れて來たのみならず、さう名乗るものと否とを問はず、普通の學校以外に獨立した通信教授機關としての設備を有してゐるものも少なからぬやうになつた。就中、帝國實業講習會の如きは最近の創立に係り、しかも早稻田大學や大日本國民中學會など、共に、今や斯界の重鎮を以て目せられつゝあるものである。——通信教授機關の榮えに榮えつゝあること、凡そ上述の如し。思へば今日の獨學者は、まことに幸ひなる哉!

第二節 根本問題——事實果して通信學校 たりや否や

△今日の講義録は必ずしも普通の學校より發行さるゝを要せず▽ 既に言

うた如く、もとく講義録は、普通の學校から發行されるに限つてゐたものであるが、今日では普通の學校にして通信學校を兼ねるものと、専門の通信學校とが相半ばしてゐる——否、寧ろ後者の方が數に於ては前者を凌駕してゐるほどの有様である。しかも兩者は共に通信教授機關たるの點に於て一致してゐるので、即ち其の立場に於ては彼も此も同じく通信學校たりと見てよいのであるから、今日の講義録は凡て通信學校より發行されるものであるが必ずしも普通の學校より發行されることを要しないといふ譯になる。換言すれば、普通の學校が立派に存在し、その教場に於て爲された講義を記録したもの、或ひは之と同様のものを以て内容とするに非ざれば、決して講義録は成立たぬと言つたやうな、窮窟な事は、今日、最早や無くなつてゐるのである。

△たと通信教授機關によつて發行され學校的教育を施すものたることが必

要▽こゝに於てか、講義録の觀念は、昔と今とに一變した所があることを悟らなければならぬ。昔の講義録は普通の學校の「講義の記録」を意味してゐたところが、今の講義録は然うでない。普通の學校の存在することは講義録成立の必要條件でないといふ。さうすると、講義録は單に學術の講義を以て内容としたものであれば可いといふことに成りさうだが、併し其れでは普通の書籍と區別が付かなくなる。講義録は通信教授機關によりて發行せられ、普通の書籍と選を異にする所以は、即ち其の學校的教育を施すものであるといふ一點に在りと信じてゐるのである。この故に、著者は凡ての通信教授機關を呼ぶに、直ちに通信學校の別名を以てしてゐる。その自ら使用してゐる名は某會——例へば「大日本國民大學會」といふが如き——であらうと何であらうと、いやしくも通信學校たるの實なきものは、これ取りも直さず講義録發行の資格なきものである。やはり似て非なる通信教授機關であると

謂ふを憚らない。

△事實通信學校たりや否やは講義録選擇上の重大問題▽ 勿論、この通信學校には普通の學校に於て見る如き諸般の設備（例へば教場其他の如き）は必要でない。故に一種特別の學校たるには相違ないが、普通の學校に對すると同様な考へを以て見てはならないのである。たゞ通信學校たるの資格としては、その發行する講義録に依りて謂はゆる學校的教育を施すに足るだけの設備が整つて居ればよい。少なくとも其れだけの設備が整うて居らぬ限りは、どうも通信學校といふ名を冠らせる譯には行くまいと思ふのである。何が扱て通信教授といふ事業が盛大の觀を呈して來たのは、漸く此頃の事に過ぎないので、斯界は未だ混沌たる状態を脱して居らぬ譯であり、且つは公々然と通信教授機關に御座候と名乗りを揚げて見たところで、別に其の資格を嚴定してある法律などが有るといふのでもなし、又、自ら通信學校と稱してゐる

ものも少ない事だしするから、結局、講義録を發行してゐる所が、果して通信學校たるの實を備へて居るか否かといふことは、一々事實の問題として之を判斷するの外はないことになる。しかも、これは頗る重大な問題である。殊に講義録を選擇する場合に臨んでは、是非共、この問題を一考しなければなるまい。言ふまでもなく講義録の選擇は「學校の選擇」「書籍の選擇」等と同様の意味に於て、學術を研究する者の忽諾に附すべからざる事なのである。

△學校よりも書店に近く、教育よりも出版事業に傾くは可ならず▽ 講義録を發行してゐながら、學校教育を施すに足るだけの設備を缺いてゐるものは、その性質、學校よりも寧ろ書店の方に近いのである。さうして通信教授といふ事業は、教育よりも寧ろ出版事業の方に傾いて來る。もとより講義録の發行は、一面に於て出版事業を意味することになるのが當然の成行きだけ

れども、その主眼は教育に在らねばならない。然らざれば、通信教授機關も書店も選ぶ所がなくなるのである。もつとも書籍商といふ營業は、他の多くの商業に比すれば、よほど公益的性質に富めるものと解されてゐるので、一般の出版事業といふものも、また然りと謂ふことが出来る。併しながら之を教育事業に較べた日には、遙かに營利的なものたるを免れない。

△營利的の通信教授には高價なる書籍を購讀する以上の不利益あるべし▽
教育事業として——専ら公益のために講義録を發行すると、出版事業として——に營利を目的として通信教授を行ふのとは、根本の意義が大いに異なる。従つて種々の點に於て懸隔を生じて來る。兩者は第一に教育の品位品質が違ふやうであるし、最後に至つては其の效果も違ふであらうと思はれる。殊に營利的のものに於て、教育の主眼たる知識の授受といふことを以て一種の賣物買物なるかの如くに思ひ做す惡癖を生せしめること、あたかも普

通の書店と、書籍の購讀者との間に於けると同一一般であるのは、たゞに教育の尊嚴を傷くる所以たるのみならず、延いては又、學問に携はる者の人格を低下せしむる原因となるなど、様々の面白からぬ事が附いて廻る。かくの如きは、學術研究法の精神から言つても、あまり好ましくない事である。それは猶ほ忍ぶべしとしても、通信教授の事業が營利的になつて來れば來るほど正體の怪しいものを多く生じ、ために神聖なる講義録が自ら聲價を失墜するやうなことになる。これは決して吾人の杞憂なのではない。通信教授の流行に連れて、實際世上には随分如何はしい講義録の發行所が既に早や出現せるもの少なくないのである。獨學者、もし不幸にして此の如何はしい講義録を購讀することになつたならば、ズント高價な書籍を買つて讀むよりも、遙かに不利益な事が無いとは限らない。それだから、營利的なものに對しては、先づ購讀者の方で油斷なく警戒して懸かるの必要がある。

△一面出版事業の性質を有する以上、多少の營利的是免れざる所▽ さればとて、獨學者は此の營利的といふことに就いて、あまり神經質になつては宜しくない。營利的事業、必ずしも悪くはないと、前にも一寸申して置いたが、これは、蓋し營利的事業の性質たる、元來さう悪いものではない筈だからである。既に今日は農工商、何一ツとして賤しい業務と考へられてゐるものは無い。畢竟、營利といひ、公益といふは、たゞ程度の問題たるのみで、營利的事業の一面は公益に在り、又、公益的事業の一面は營利に在り、いづれも其の一方を極端に貫徹せんとすれば、土臺、事業は成立たなくなる。講義録の發行とても亦その如くで、教育を主眼とすれば、疑ひもなく公益的事業に屬すべきものではあるが、しかも同時に出版事業たるの一面を有する以上は、多少共に營利になるのは數の免れざるもので、これをしも非なりとして咎め立つるが如きは、寧ろ世事に盲目なるものと謂はなければならぬ。

それ故、多少營利になるのは致し方がないとして、たゞ肝腎なのは其の程度如何である。あまり營利的の甚しいのは、その公益的事業たるの本分を忘れてゐるものであるから、かういふのは眉に唾して、だまされぬ用心をするに若くはない。

第三節 先づ講義録の發行所に對して必要な注意

△殊に廣告を利用するものに對しては能々その正體を見極めること▽ 今日の講義録が盛んに廣告手段を採りつゝあることも前に一言した所だが、これも或る程度までは餘儀ない事として恕すべきであらう。併し往々にして廣告を濫用するものあるに至つては、寧ろ憎みても餘りある次第である。廣告の通弊として、自ら世間に吹聴する所が幾分誇張を來すのは是非に及ばぬと

しても、ことさら羊頭狗肉の悪策を巡らす者の如きは最も卑劣と稱すべく、これぞ講義録界に於ける獅子身中の蟲で、もとより眞個の通信教授機關を以て目すべきではない。ひとり講義録に限つた譯ではないけれども、動もすれば中央の大都會などには、立派な名稱を以て、麗々しく新聞紙上その他に廣告を掲げ、盛んに『通信販賣』の如き業務を營んでゐるやうに見せ掛けながら、その實、これを以て地方の善良なる人の目を眩まし、或ひは詐偽に陥れて不正の利益を貪らんとする奸商の類が少なくないのである。講義録も斯かる手合ひによつて發行せられるのは、普通の書店で發行するものよりも尙ほ心許ない。通信販賣も、通信教授も、共に顧客なり購讀者なりを離れて存在するものであるから、よく／＼其の正體を見極めて置いてから之に依頼するやうにしないと、それこそ飛んだ目に逢はなければならぬのである。といへ、通信教授機關の正體は望遠鏡を以て洞察するといふ譯には行かない。

たゞ有らん限りの材料を綜合して其の眞偽、價值などを判断するの外、これぞと云ふ變つた手段も先づ無かりさうに思はれるのである。

△基礎は鞏固なりや、信用聲價は如何、制度設備は整頓せるか否か等の諸點▽例へば、こゝに一ツの講義録を發行してゐる所があるとする。先づ其の基礎は鞏固であるか、信用聲價は如何、制度設備は果して整頓してゐるか否か——少なくとも是等の諸點を調べて見た上でなければ、眞個の通信教授機關であるか、通信學校と稱する値打があるか何うか、なごいふことは充分に分るものではない。これが昔の如くに、良くても悪くても自分の目的とする學問の講義録は唯だ一ツしか世間に存在してゐず、之に依頼するの外、獨學の途は皆無であるといふやうな場合であるとすれば、テンデ講義録選擇の問題などが生ずる餘地はない譯で、萬事を放擲して、その唯一の講義録に就いて學ぶことにするより仕方がないかも知れぬけれども、今日は先づ多くの

場合、逆も其のやうな譯には行かぬのである。同種の講義録も一ツしか無いとは限らず、講義録は有つてもロクなものでなければ、かへつて之に勝る講義録の書籍でも買ひ集める策を採つた方が恰も測られない。或ひは其の足らぬ所を、學校其他の機關を混用することによつて補ふやうな方法を選んだ方が上分別であるかも知れないのである。されば講義録の選擇——否、總體的に獨學機關の取捨といふことは、今日最も面倒な問題であると思はなければならぬ。以下更に講義録選擇の主なる標準點二三を例示して見る。

△學校の創立年月と講義録の創刊年月とに新古あり▽ 數多ある通信教授機關の中には、その創立年月の比較的古いものと新しいものとがある。概して其の新しいものよりも古いものに、ヨリ多くの信用が置かるべきは勿論の話である。古いものは基礎も鞏固になつてゐるだらうし、通信教授の經驗に

も富み、制度設備の如きも整頓してゐる方であらうと想像されるのが通常だからである。もつとも専門の通信學校は創立と同時に講義録の發行を始めねばならぬが、之に反して、普通の學校にして通信學校を兼ねてゐるものは、その創立年月と通信教授の事業に着手した年月——換言すれば講義録の創刊年月との間に多少の隔たりがあるを例としてゐる。で、後者の場合には、この二ツの年月に注意を拂ふことが必要である。その創立年月の古いのは、普通の學校として信用聲價に缺けた所はないかも知れない。併し講義録の創刊後、日なほ淺く、通信學校として之を見れば新參に過ぎないといふのでは、まづ其の經驗も乏しく、制度設備も多くは整頓して居らぬ方であらうから、何や彼や就學者に満足を與ふるの點に於て、これよりも此の事業を早く始めたものに一步を譲り、さうして其の講義録は、また之よりも創刊年月の古い同種同程度の他の講義録に負けることになるのが當然であらう。

△通信教授の方法も講義録の内容も共に古きは感服せず▽ さりながら、講義録の古いと新しいとは、その價値を測量すべき唯一の目安となるものではない。徒らに古いばかりで、不斷に改良進歩といふことが無かつたならばその講義録には徹が生えるのである。何事も日進月歩の世の中であるから、すこし保守主義が過ぎると、すぐ舊式と見られるやうになる。舊式の通信教授は有難からぬものであらうと思ふ。之に反して、常に改良を加へて怠ることかなければ、常に新式の通信教授と稱して誇ることが出来る。ところで、創刊の古い講義録は、兎角、舊式の通信教授になりたる弊があるから、この點は殊に注意を要する。普通に講義録は一種特別の制度の下に發行せられてゐるので、その發行方法は雑誌に似て同じからず、普通の書籍とは勿論大差がある。毎月一二冊づゝ刊行して、短きは半年、長きは二年半ぐらゐで終るものとなつてゐるが、その回数が重なる毎に、讀者の顔は新規となつて行

くので、往々にして一回目と二回目と、殆ど同一の内容のものを讀者に與へて済ますやうなことがある。さうすると、去年の講義録も、今年の講義録も内容に於ては變化がないやうな譯になるので、それだけ日進月歩の時勢と共に推移するといふことなく、保守的になつてゐるものと見なければならぬ。講義録の内容たる學術が古く、さうして通信教授の方法まで舊式だといふのでは、之を購讀するのよし悪しである。何等の理由もなく、たゞ新奇なものを歓迎するが如きは、輕薄な考へとして排斥すべきだが、その反對に古くさへあれば上等のものとして信用が出来ようなど、心得るものも、また誤りである。講義録は骨董品のやうなものだと思つては不可ない。

第四節 普通の學校兼通信學校と専門の通信學校

△彼れの信用と此れの廣告との差引勘定▽ 普通の學校にして、既に社會の信用を博してゐるものは、その發行する講義録も、共に相當の信用を拂つて見られる利益を有してゐる。故に講義録を創刊するのにも、よほど割が好い勘定である。それが専門の通信學校であると、如何に堂々たる名前を用ひて見ても、さながら天上に彗星の現れる如く、突然社會に打つて出て、講義録の創刊を發表したのでは、疑念深い世人は多少共に其の正體を怪んで、直ちに充分の信用を與へない者が多いから、たしかに損は損である。之がために専門の通信學校は、自然、餘計な廣告もせねばならぬことになる。又、それに應じて一切の設備や、通信教授の方法などにも特別に念を入れねばならぬことになる。その結果、専門の通信學校より發行される講義録は、その學校としての信用に比し、案外優良なものとなつてゐることが間々ある。普通の學校は、その學校たるの體面に對して、あまり猛烈な廣告手段を採ること

などは遠慮しなければならぬ。講義録を頒布する上に於ける第一の武器は實に此の廣告なのであるから、之を控へ目にすべく餘儀なくされてゐる學校は、また少々の損と謂ふべきである。が、その代り、前申す通りの信用といふものが學校には附いてゐる。思ふに此の信用と彼の廣告手段とは、まさに釣り替へられてよき程のもので、普通の學校と専門の通信學校とを比較して見る場合には、しばらく双方から之を差引いて考へるのが、或ひは公平を得る所以であるかも知れない。

△その信用を擔ぎ過ぎるも不可、其の廣告に誤らるゝも不可なり▽ 勿論普通の學校としての信用は、必ずしも直ちに通信教授機關としての價値を語るものでもなし、いはば信用に信用なしの當世、殊に消極的な信用よりも積極的な廣告の方がヨリ多く衆人を引寄せ力を有してゐるやうでもあるし、かたゞ今日の事實として、格別深い理由が他に無さうであるにも拘らず

普通の學校は、専門の通信學校のために壓倒される氣味を示してゐるものが少く、少なからぬ様子である。が、時としては其の反對に前者が後者を壓倒してゐることもある。是れによつて見るも、世間には廣告に誤られる者、もしくは信用を擔ぎ過ぎる者の絶えざることが察せられるのである。——要するに、普通の學校としての信用や、専門の通信學校が相應の程度を越して用ふる廣告などは、寧ろ講義録にとつては「着物」位なものに過ぎまい。その頗る華美なる外觀に心を奪はれて、不知不識、肝腎の正體を見損ふやうな事が有つてはならないのである。

△通信教授機關として見れば普通の學校必ずしも悉く信用すべからず▽
また中には、普通の學校にして、未だ信用に乏しきは勿論、傍ら通信教授を行ふなどいふ餘裕があるまでに、學校が立派に成立つて居らぬものもある。斯かる學校の發行する講義録も實は怪しいものである。それから又、これは前

にも一言して置いた事であるが、今日なほ時とすると、一方に於て自校の校內生に讀ませることを目的として講義録を發行してゐる學校もあるやうである。あだかも其の講義録は校內生に與ふる教科書、參考書類の如きもので、一般の獨學者には寧ろ不向きなものではなからうかと考へられる。しかも之を校內生には無料で頒布し、たゞ校外生のみから相當の代價を徴してゐるなどに至つては、通信教授か書籍の販賣か、聊か疑問たる能はずである。立派な學校の發行する講義録にも、こんな曖昧なのがある。講義録を發行する所としては、普通の學校もまた必ずしも厚い信用を許さるべきではない。

△理想としては専門の通信學校が第一、但し事實としては未だ優劣不定▽
けれども一般に就いて言ふと、普通の學校にも多少の特徴が無いのではない。蓋し學校には學校の長所がある。就中、それは既に學校として成立してゐるものであるから、その成立の基礎を、直ちに移して通信教授の根柢に据

え得るといふ一大利便を有してゐるので、この點に於て、未だ發達の半途にある専門の通信學校などは、遠く三舍を避けなければなるまい。勿論、普通の學校と通信學校とを全然區別して考へると、普通の學校が講義録を發行するのは、即ち通信學校を兼ねるに過ぎないので、これは其の本業に非ざるや明かである。そも、通信學校なるものは、所謂「分業」の結果として、普通の學校以外に現れ出で、今や一種特別の學校として發達しつゝあるものであるから、分業が進歩を意味してゐる以上、理想の講義録は、通信教授を以て本業とするもの、即ち専門の通信學校より發行されるのが當然であらうと思ふ。が、併し今日は未だ理想の講義録が其所此所に見出だされるといふやうな時代ではない。事實に於て普通の學校と専門の通信學校とが、いずれも通信教授機關として殆ど優劣なき地位を保つてゐることは非認し難いのである。

△本來の意義に於ける講義録と今日一般の講義録▽ 殊に、我が本來の意義に於ける講義録、即ち學校の講義を其儘記録したものに至つては、普通の學校に非ざる通信教授機關の凡てが斷然發行し能はざる所のものである。例へば早稻田大學といふ學校の講義録は、ひとり其の早稻田大學が之を發行し得るのみで、早稻田大學以外に早稻田大學の講義録があるべき理由はない。此の如き講義録は、此の如き學校（即ち普通の學校）が存在してゐなければ發行の仕様がなないのである。併し既述の如く今日の講義録は、必ずしも皆、斯様な學校の講義録たることを要しない。早稻田大學のやうな學校でなくとも、早稻田大學の政治科なら政治科と同種同程度の講義録を發行することが不可能でないのである。現に其の早稻田大學自身も事實に於て校内に相當學科を有して居らぬ講義録を發行しつゝある位だし、其他いづれの學校にもせよ、校内の教育と校外の教育とを全然一致せしめてゐるものは、或ひは最早

や稀有の例となつてゐるかも知れない。

それで、今日は普通の學校より發行するものと専門の通信學校よりするものを通じ、總體に於て本來の意義に於ける講義録は僅に一部分を成してゐるのみで、講義録といふ講義録は寧ろ大部分その然らざる方に屬してゐる位の有様である。前段に掲げた「一方に於て校内生に讀ませることを目的としてゐる講義録」は、即ち何れかと云へば本來の講義録その儘のもので、そもそも講義録發達の初期にあつては、これこそ殆ど唯一の講義録であつた譯だが、今日となつては餘り一般に流行らない。流行らないのも道理かや、それは昔の講義録と大差なきもので、最も進歩したる獨學機關などいふものには遠い方だからである。

第五節 眞個の講義録か否かの簡易識別法

△再び「學校的組織を有するや否や」の根本問題に到着す▽こゝに於てか、結論は再び根本問題に到着せざるを得ない。曰く、普通の學校であると専門の通信學校であるとを問はず、要するに學校的教育を授くるの資格なるもの——通信教授機關にして學校的組織を有するもの——は、即ち眞個の講義録を發行し得るもので、之に反して學校的組織を有せざる通信教授機關——學校的教育を授くるの資格なきもの——は、かの「似て非なる講義録」を發行し得るものたるに過ぎない。であるから、眞個の講義録を發行し得るものは、矢張り「通信學校」の名を冠せしむるに足るものでなければならぬといふ次第である。ところで、或る一ツの講義録を發行してゐる所が學校的組織を有するものなりや否や、即ち通信學校たるの實あるものなりや否やは、もとより容易に斷案を下すべからざる事實問題であるが、大體に於ては、普通の學校や普通の書籍などの良否を鑑別する場合と同様の注意を以て之に對

すれば、或る程度までは其の正體が知らるべき筈である——といふ大々的方法だけは前にも一寸言うて置いたが、さて之を實行すべき筋書如何が此場の問題となつて来る。

△世間の噂、評判の類を別としては「見本附規則」が先づ第一の材料▽

今、その簡易な、且つ在り來りの方法を言うて見れば、まづ斯うである。即ち此頃の講義録發行所では、別に其の説明書又は案内書であるやうな「見本附規則」と云ふものを發行して、その購讀者たらんとする人々に豫め之を與ふることにしてゐるのが一般の風である。いはゆる見本附規則は、あだかも學校の規則書に廣告を加味したやうなものに出來てゐるのが通例で、之に就いて見れば、その通信學校としての組織、講義録の内容などの一斑が窺知し得られる。されば何よりも先づ第一着に此の見本附規則なるものを取寄せて見る事である——普通の學校では流石に其の規則書などを「無

料贈呈」するの例なしたが、之に反して講義録の發行所となる、普通の學校たる否とに論なく、郵税までも自ら負擔して見本附規則を配布するに力めてゐるものが多いのは、やはり通信教授が「通信販賣」と似た呼吸を用ひ、かの「商品目録」などを無料贈呈してゐるのと同筆法を採つてゐる證據の一に外ならない。しかも世間の噂だとか、評判だとかいふ側（一般の許し且つ認むる信用聲價の如きも、また畢竟こゝに存するものに外ならないので大いに重きを置いて見るの必要あるは勿論だが、さりさて通信學校としての組織を有するや否やに對する嚴正批評、乃至その細密なる説明などを聞かんとするには、通常の噂や何かでは餘り漠然として物足らず、また一々誠の事として受容れる譯にも行くまい）を取除いて言へば、この見本附規則なるものこそ、その通信教授機關の成立ち大要を見て取るべき材料としては、殆ど唯一の比較的に纏まつたものであるのだ。まづ手始めとしては、之に依

つて概略の判断を下すといふのが、蓋し當然の途であらう。

△唯だ漫然と見本附規則を通讀したのみでは識別し易からず▽ではあるが、一體、講義録といふものに就いて多くの知識を有せざる人が唯だ漫然と「學校の規則書に廣告を加味したやうなもの」を通讀したのみでは、直ちに一講義録の良否を識別するといふことが間違ひなしに出來得ようとは逆も信じられない。そこで、更に深く一步立入つて、そも／＼完全なる講義録とは如何なるものか、理想の通信學校とは如何なるものか、殊に其の組織、成立も如何などを一應心得て掛かる必要が生じて來る。勿論、この點は先きにホンの一端を述べて置いた次第であるが、なほ聊か追加して置くのも強ち無用な事ではなかうと思ふものである。

第十四章 講義録研究法即ち被通信教

授法

第一節 講義録研究法の心髓また茲に存す

△眼目は學校的組織即ち制度設備の上に在り▽通信教授機關の學校的組織といふは、主として其の制度設備に在るものと心得て不可はない。事實、通信學校の名に對して耻かしからぬ丈に諸制度、諸設備等が整頓してゐるものならば、よしや其の公稱する所は「學校」でなく、今日多くの場合に於て然るが如く「某々の會」などであらうとも、それで通信教授機關の學校的組織は完全だと謂へるが、之に反する場合は、或ひは堂々たる「大學」(普通の學校) 兼營に係り、或ひは公然「通信學校」と名乗つてゐたからとて、未だ事實上、完全なる通信教授機關としての學校的組織を有するものと謂ふ譯

には行かないのである。要するに通信学校の通信学校たる所以、殆ど一に繫つて此の制度設備上に存す。講義録選擇の場合に之を批判の中心點と爲すべきは勿論、凡そ「被通信教授法」即ち講義録に依つてする學術研究法の眼目も、また實に之を利用して遺憾なきを期するにありと思惟すべきである。

△人多くは此の制度設備に就いての知識を缺く▽併しながら由來、我國の講義録發行所にして、普通の學校が之を兼ねる場合に其の本業たる學校の名を表着板となし、やはり只の學校たることを標榜するのみの例も少なからぬ位で、之を專業とするもの否とに論なく、先づは尋常に「通信教授機關」と呼號し、更に一步を進めては堂々と「通信學校」の名乗りを掲げるものが甚だ多くなつた——若しくは斯業の日に日に隆盛を告げて來た割合に、それが一種の教育機關たることを表示し、特に世の人に對して第一その點を廣告して掛かるなどいふ遣り方の方は遅々として行はれなると同時に、世人も

また一般に此の毛色變りの教育機關を雲煙過眼し去り、寧ろ餘り寛大に視るを常としてゐた。それかあらぬか、今迄に通信教授機關の制度設備などが世上の問題となつたり何かした話は聞くさへも稀れであつた。斯かる次第であるから、そも通信學校の制度設備は何ういふのが完全なのか、優良なのか、乃至また現在我國に於ける講義録發行所の制度設備は何ういふ具合に出來てゐるものか、此邊の事に知識を缺く人の最も多きは決して怪しむに足らない。

△信用聲價、風聞、廣告其他いづれも此所に根據を有せざるは非▽ところが、何よりも肝腎な點は其の制度設備にある。それが通信學校の生命であり、意義であるのだ。かの信用聲價の如きも、その通信學校としての制度設備如何といふ上に確個たる根據があるのでなければ、殊に之を以て唯一の事業とせず、普通の學校又は書店などの兼營してゐる場合は尙更さうだが、と

もすれば的を外れたるものであることが無いには限らぬ。何れにしても世人の多くは其れに就いての知識が缺けてゐるのである。道路の噂だとか、其他の評判だとか、總じて根もなく葉もなく扱は中心さへも何處にあるやら分らぬ風聞の如き、如何なる程度に重きを置いて耳を傾くべきものであるかは、また以て知るべき而已ではなからうか。——語に曰く「悉く書を信ずれば書なきに若かず」と、況んや廣告に於てをや。たゞに新聞廣告のみではない。講義録の見本附規則なるものも、その一部に廣告を含んでゐる限りは、少くも其の分だけ特別に見るの用心が無くてはならない。——学校の創立年月講義録の創刊年月、共に古きみを以て尊しとせず、而して歸する所、最も尊しとするのは矢張り制度設備の整頓といふ一事が是れである。その整頓せることは、即ち又、基礎の鞏固なることを意味して來なければならぬ。——それだから、批判の中心は殆ど「制度設備の整頓せるや否や」の一點に在り

として不可なる所以がないのである。

△一の制度ありて百の設備が生じてゐる▽ 一口に制度設備と言ふが、その意義は如何？「制度」は直ちに組織の義と解してもよし、また仕組、方法規則などいふ意味を捏合せたものと考へてもよい。即ち無形的の組織又は法則の方に當つてゐる。凡そ國家社會でも教育でも學校でも、一として此の制度の上に立つて居らぬは無く、その骨子とする所を記録したものが、取りも直さず國家ならば法令、學校ならば規則書の類に外ならない。次に「設備」は普通に有形物（人を含む）の方を指し、その一切が詰まりは、根本たる制度に準據して整へられることになる。だから、一の制度あつて後に百の設備も生じて來るの理で、單に制度と言へば、おのづから其の中に設備が包含される事と心得てもよいのである。

△通信教授機關にあつては殊に有形の設備よりも無形の制度が重要▽ で

何は措いても學校に就いて見る人は、第一に此の制度如何を看破するの要がある。これこそ其の精神であつて、諸多の設備は寧ろ外面の體軀に外ならぬ。勿論、精神ばかり如何に立派であつても、まるで空虚なる體軀を有したのでは幽靈的になるが、しかも教育は随分精神のみを以て行はれる例もある。それとは正反對に、外面より學校を観察する人は兎角二の次ぎの體軀に目を注ぎ過ぎて、或ひは之がために眩惑される弊などもある。例へば有形の設備に屬する校長、教師の如き人物の肩書や名前を尊重するの餘り、寧ろ肝腎な事——即ち根本の制度と之を引合せて其の價値を判断する事の方を忽諸に附する者が少なくない。殊に通信教授の場合にあつては無形の制度は言ふも更、接近して見れば見得べき諸設備すらも、大概遠方に居る人々（その教授を受くべき側の）よりすれば、直ちに逐一その真相を看取することが困難なのは當然である。たゞに然るのみならず、元來この通信學校たるや、普通

の學校とは聊か趣きを異にし、その教授を受くる側の人々が直接に利用し得べき諸設備、即ち直々に接觸すべき有形物といふものが極めて少ない方であるから、なほ一層、無形の制度が重要な地位に立つて来る。さて斯うなると、ますます眼目となるのは通信學校の制度そのもので、畢竟するに講義録研究法の心髓も亦そこに胚胎するのでなければ本統ではない。

かの見本附規則は、多くは規則書に廣告を加味したやうな實質を備へてゐるが、また中には純然たる規則書の體裁を成してゐるものも見受けられる——この方が質素で、經費も廉に出来るは勿論だが、殊に眞面目で、學校らしい態度なるを可とすべく、無暗に華美な商品目錄式を採用するなどは、何れかと云ふと輕佻な米國流の販賣制度に接近し過ぎるもので、決して善良なる教育制度、否、少なくとも其の精神に準據しての沙汰であるとは思へない。が、兎に角この見本附規則なるものを一覽したならば、第一着に通信學校と

しての制度設備、就中、制度如何に對し悉く注意を集中して、大いに得る所が無ければ不可なのだ。

第二節 飽くまでも其の長所を利用せよ

△通信學校は半ば學校に等しく講義録は半ば書籍に等し▽ 講義録の選擇法にもせよ、之に依つてする研究法（即ち其の本領）にもせよ、微より微、細より細に互つての事は、なかく一朝一夕に説明が仕盡せるものでない。併し其の双方に對し、一樣に普通の學校、普通の書籍に於けると同様の遣り方が或る程度までは應用されるといふ便宜な點があるから、その邊は大いに省略して置くことが出来る。たゞ講義録に限つた事だけは一通り述べて仕舞ひたいが、煎じ詰めて見ると、その特別な點は矢張り通信學校の特別な制度設備に基く所のものに過ぎない。よつて引續き其の概要を説明すると同時に

相成るべくは讀者自ら之より割出して講義録研究法の心髓を會領されるやうなことに願ひたい。くれぐれも講義録に特別な點だけを此所には掻摘んで述べる譯であるから、左様御承知を願ふといふ次第である。

さて通信學校の制度設備は、必ずしも全然普通の學校に於ける其れと同一であるべき理はない。兩者の間には根本的に「筆の教育」と「舌の教育」との差異が存してゐる。さうして此所から又あらゆる相違が生れて來ることになる。元來、講義録は一面に於て普通の書籍と同様の性質を有してゐる。と同時に、通信教授機關の立場は一面やはり普通の學校と相似てゐるのである。それ故、通信學校及び其の發行する所の講義録を合して一としたものを考へて見ると、正に是れ、或る一種の「混血兒」と謂はなければならぬので左の算式は優に此の關係を表示するに足らうと思ふ。

$$\frac{1}{2}(\text{普通の學校}) + \frac{1}{2}(\text{普通の書籍}) = \text{通信學校} + \text{講義録}$$

之を譯して言へば「通信學校と講義録との和は半學校半書籍の和に等し」
となる。畢竟、こゝが謂はゆる特別な點の骨子に外ならない。

△研究機關の不足は研究法を以て補ふべし▽ 蓋し學術の研究機關として
見るに、事實、通信學校は「半學校」位なものである。その代りに講義録の
方は少くとも獨學の機關として見れば「半書籍」どころか、寧ろ書籍の一倍
半位のものがある。否、果して其の通りならば、通信學校と講義録とを寄合
せたものは丁度學校と書籍とを寄合せたるものに等しくなる勘定で、正に理
想的であるが、それは少しく怪しい數學で、事實また其の域には達してゐな
い。併しながら學校に「教授法」があつて生徒に「被教授法」がなく、書籍
に依る研究法として「讀書法」の存するありと雖も、書籍そのものには「唯
だ」著述の精神があるのみで「教育の觀念」が乏しいといふ缺點を免れざ
るに對し、通信學校それ自身に教授法があり、講義録それ自身に教育の觀念

があるを相待つて、之に依つて學術を研究する者の側に最も有意義なる自修
法、獨學法の存するを以てすれば、右に述べたやうな多少の不足も補はれ、
事實上、必ずしも未だ完全ならざる研究機關を利用して、寧ろ完全なる研究
法を成立たせるといふことも、まゝ強ち不可能ならざるべしと信する者であ
る。即ち此所に講義録研究法の要訣が籠つてゐる譯であるが、さて之を充分
に了解するの途は、矢張り唯だ通信學校及び講義録の長所短所を呑込んで掛
かるより外にはない。その短所を捨て長所を取り、さうして飽くまでも此の
長所を利用するといふ分別手段こそ、何よりも大切、何よりも勝つた「奥の
手」であらうと心得てゐる。

△獨學の機關としては寧ろ長所を綜合せるものに近し▽ 斷るまでもなく
學校には學校の長所があり、書籍には書籍の長所があるので、通信學校及び
講義録が悉く其の長所を併せ有して居る筈はないが、しかも獨學の機關とし

て之を見れば、それ自身既に學校と書籍との双方より短所を捨て、たい長所のみを取つて来て、之を其の固有の成立ちとしたといふ鹽梅の、一風變つた性質が無いとは謂はれぬのである。故に『半學校半書籍』と云ふのは、必ずしも其の全體が學校半分、書籍半分の成立ちを有するといふ意味ではなく、寧ろ或る一面（明瞭に言へば獨學機關としての立場）より見れば、確かに双方の長所ばかりを引抜いて兩々組合せてあるやうな性質があるとの意味に外ならない。勿論、その書籍に似た側に就いては反復説明するの要がなからう。こゝには唯だ學校に似た方面を主として一言附加するに止める。

第三節 通信教授法、對、被通信教授法

△學校に類する所と然らざる所とを識別して當るを要す▽ 既に通信學校と云ふ。大體に於て通信教授機關の根本を成す「制度」が普通の學校に於け

る其れを則つたものになるのは、もとより其の所である。が、凡そ學校の制度が如何なるものであるかは、既に讀者も知つて居られるだらう。一言を以て之を掩へば、すべての通信教授機關を通じて——その如何なる種類及び程度の教育を目的とするものたるを問はず——苟も根本たる制度に於ては普通の學校に近似してゐれば近似してゐるだけ、それだけ其の制度は完全なるに近く、その機關は至極優良なるに近いものと見ることが出来る。これは單に骨子たる部分に就いて兩々比較を試みたばかりでも、まづ概略の事は窺知し得られるのである。例へば或る學校の規則書と、かの「見本附規則」なるものを一寸突合せて見れば、その通信教授機關が如何ほど學校らしく出来上つてゐるかは、必ず具眼者の心附く所となるに相違ない。殊に、數年前までは敢て「通信學校」と自稱するものさへ絶えて無かつたといふ位で、一般に之を學校らしくすることに就いての自覺などが眞個にあつたりや否や、第

一それからして疑問なのだが、例の「似而非講義録」の販賣を目的とするものに非ざる限り、今日依然として通信教授機關が學校的制度的上に屹立せる觀を有して居らぬ場合は、やはり劣等の通信學校と看做すの外はないのである。但し普通の學校と通信學校との間には「舌の教育」「筆の教育」といふ根本的の差異が存してゐる以上、これが又、或る程度まで兩者の制度的上に於ける相違を大ならしめて居るは當然で、無論この點は先づ差引いて考へることにならなければ不可ない。さうして其所に「被通信教授法」即ち講義録研究法の短所もあり、また其所に獨學法としての一大長所もある譯なのだから、その邊は明確に見分けを付けて掛かることが第一要務と心得て可なりだ。

△明確なる教育を受け、完全なる學術的知識を修得すること▽今、一二の點に就て言うて見れば、第一に通信學校の授くべき教育の種類及び程度が夫々に一定したものであるは勿論の事とする。但し同一の通信教授機關が二

種以上の講義録を發行する例も少なからず、恰も是れ一學校に數科の分立があること異なつた所はないので、この場合は個々の講義録に於て其の一定したものがあつたと謂へば足るのである。さうして其れが普通の學校に於て見る如く、一定の教授學課であるとか學課程表であるといふ名目の下に、麗々々規則書などの上に掲載されることになる。この規定は、苟も堂々たる通信學校ならん限りは嚴乎として犯すべからざるものとして置かれる筈である。所謂「筆の教育」は悉く之に準據して施されねばならぬ譯である。それを紙上に盛上げたのが即ち主たる通信材料——今日まで一般に講義録とは呼ばれてゐるものだ(その中に紹介した「帝國實業講習會」洋名「帝國商業通信學校」は創立年月の最新なる方だが、名まで新たに「講習録」といふのを用ひ出した。併し「講習録」は決して適切ではあるまい。改良ならずして寧ろ改惡の方だらうと思ふが如何のものにや)。従つて講義録の代表すべき教育の内容は